女鑑

明治二十六年三月二十日發行

第三十五號

東京國光社

女鑑第三十五號目次

女鑑

卑弱下人

論說

女子四期の心得……大林弘一郎

女子要言第二篇(七)……三輪田眞佐子

史談

徳川吉宗の母巨勢氏……小野利三郎

丹波國の孝女……三浦千春

家政

看護法捷徑(十二)……三笠舍主人

料理法(十五)……待月菴

漫錄

古今集傳授一班 森馬太●女誡和解 內藤燦聚●藻鹽草 楢の舍●村田春海歌がたり 松野操雄●女子の地位を高むべし 內田隍南●婦女髮飾 井上賴文●澤庵漬に三種の說あり 內田隍南

文林

書師の妻(其五)……江見水蔭

歌 近衛忠熈●德大寺實則●東久世通禧●鍋島直大●高崎正風●前田利嗣●長岡護美●前田利鬯●植松有經●谷勤●松浦辰男●林甕臣●藤井行麿●三浦千春●佐々醒水●關大久樂●小澤幸民●栗原宜太郎●波渡里華清●鍋島榮子●前田朗子●小池道子●伊東ちせ子●伊東生子●西四辻茂子●松平健子●安東菊子●目黑和三郎●松浦辰男

文 育兒論 溶武かめよ●梅 尾崎すう子●船路の記 故人鼓氏

雜報

●行啓●孝女に賞與●孝女●感ずべき少女●前栽●境遇●又

餘芳

みくるまのあと(つゞき)

敎の庭

歌文 數十首

口畵……富岡永洗

挿畵……武內桂舟

徳川吉宗の母



女鑑 第三十五號

女鑑

卑弱下人

謙讓にして恭敬、人を先にし已を後にし、善有れば名とすることなかれ、悪有れば辞することなかれ、辱を忍び垢を含み、常に畏懼するが如くせよ、是を卑弱人に下るといふとは、後漢の曹氏が妻、恵姫の女戒七章中、首章に唱ふる所なり」。

方今洋化主義により、女教論を唱ふる者の言にいはく、東洋の習俗、殊更に女をして卑弱ならしむ。同じく是れ人にして、共に世に立ち家を保つ。然るを、女子は男子の奴隷の如く然り。豈かくの如き理あらんやと。

吾人は男女の性格を論じて、女子は男子に先ずべからず、その男の下にあること、

は、資格禮數の上に於きて、當に然らざるべからざること、常に之を說けり。又前回に於いて、遜讓は禮の本なることを述べたり。熟、卑弱下人の本旨を察するに、是れ禮の大本たり。旣に禮の大本に原づきて人に下る。何ぞ殊更に、女子をして屈從せしめむとなさんや。又況んや、女子の權利を殺ぐといふに於いてをや。易曰、家人利女貞と。蓋し一家の內、女子にして正道を履み、舅姑に柔順に、弟妹に驕らず、務めて卑弱人に下るの方に出では、一家和睦して風波起こらず、家道こゝに榮ゆるをいふ也。詩に、宜其家人とあるも、婦人の舅姑弟妹に善くして、和道を執ることを云へり。左氏は婦道を說くに、聽にして婉なるべしといひ、惠姬は曲從とも稱へたり。是れ皆聽從柔婉に、舅姑に曲從する意にして、畢竟卑弱下人の本旨を出でざるなり。抑一家の和樂は、稱揚すべき善德に

して、その和樂の源は、婦人の卑弱下レ人より生ぜさるはなし。果して然らば、人に下る德、また大なりといふべき也。

舅姑の我を愛するは何の爲ぞ。弟妹の我を譽むるは何の爲ぞ。學識あるが爲にあらず。敏才あるが爲にあらず。而して辨口あるが爲にも非さる也。我を愛し我を譽むるは、彼に聽從して此に柔婉なるが爲也。舅姑既に我を愛し、弟妹既に我を譽む。一家の和樂是レより生ず。是一家の和樂は、只一人の德によりて生ずとなす所以にして、婦人の卑弱の德は、啻に一人の身を淑くする爲に非さるなり。

然れども、卑弱下レ人は、已レに損失あるが如し。此を以て、直に權利を毀害する者となし、務めて東洋の風俗を破らんとす。此等の者の眼中、既に一家の平和なし。故にこの主義を執りて、人の家に嫁する者を見るに、我は學問あり、藝能あり、

才智ありと稱して、謙恭己レを持せず、己レを先にして人を後にし、善事は己レの功となし、惡事は人に讓る。忍含の心を養はずして、些事も色を以てす。常に揚々自得して、畏懼の念、心頭に起こらず、舅姑に不遜にして、弟妹を虐使し、甚しきは、舅姑に向ひて權利を爭ひ、弟妹に對して義務を說く。是を以て、舅姑愛せず、弟妹譽めず、各自心に慊然として、何事も紛爭の因となる。勢此の如きに至る。一家の平和、忽崩れて又收むべからず。凡世の一家紛爭の因を探ぬれば、婦人に歸する者多く、而して婦人の卑弱下レ人の德なきに基せざるはなし。嗚呼卑弱下レ人は卑屈怯弱の謂に非ずして、禮の大本、一家和樂の起因たり。古歌に謂はずや。

風さゆるとしまが磯のむら千鳥
たちゐはなみのこゝろなりけり

と。千鳥の擧動、一に波の立居に從ふ。波の立居に從ふを以て、危害なく平安たり。古より是を以て、婦人の養素となす。所以なきに非さる也。吾人は夫れ、卑弱下人の徳をとらんかな。

論説

女子四期の心得

大林弘一郎

人の生れて男女あるは、天地自然の道なり。陰陽の理也。故に男子長じて必ず室あり。女子長じて必ず家あり。是既に人倫の常のみ。復何ぞ怪まんや。

さて女子の生れてより、以て身を終ふるに至るまでは、之を大別して四期となすべし。是余一人の僻見にあらず、古人既に其説あるとなり。乃ち禮記の大傳にも

言へるとあり。曰く、其夫父道に屬するものは、妻皆母道也、其夫子道に屬するものは、妻皆婦道也と。此意を推して以て、余が四期の説も出でたる也。抑も余が所謂四期とは如何ん。曰く女道なり。曰く婦道なり。曰く妻道なり。曰く母道なり。是を分ち稱して四期とする所以は何ぞ。蓋し説あるなり。請ふ試に、順序を逐うて之を説辨せん。

(一)女道

女道(即ち第一期)とは何ぞや。曰く生れてより家に在るの時期を言ふなり。凡そ人の生れてより、父母の養育を受くるは、未だ男女の差別はあらざるなり。年漸く長ずるに及びては、男子は其父祖の遺緒を繼ぎて、一家の總領となるべく、女子は則ち、其匹配を索めて出嫁せざるべからず。是則男女の異なる所也。然れど

も其未た許嫁（古は二十にして許嫁するなり、）せざるに方りては、其父母に孝敬奉事すると、衆子と少しも異なるものなし。就中母に事ふるには、尤も其意を致すべき也。何となれば、其父を輕んずると言ふに非されども、父の意を安んずるものは、自ら男子のあるあり。已れは專ら母に事ふるを分とするの意を言ふのみ。經書にも言へるあり。家にありては父に從ふと。此にて自ら其本義のある所を知るべし。さて其家にありては、貞靜淑順にして、專ら父母の命に從ひ、兄弟姉妹の間に處するに、情を厚うし意を誠にして、人をして間言すると能はざらしむると、乃ち父母に孝を尽すの第一義と云ふべし。是則女子第一期、即ち女道の大要也。若し此期にして、專恣にして已れの情に任せ、放縱にして自ら省みる所なく、或は醜行を極めて身を汚し、父母兄弟を辱しむるものは、固より夷狄禽獸と倫を同うするもの、

何ぞ共に人道を談ずるに足らんや。然るに近時、歐風の弊よりして、或は知らずして此に至るものありと聞く。女子たらんもの、豈愼戒する所ありて、益々女道の本然を全うせざるべけんや。

（二）婦道

婦道（即ち第二期）とは何ぞ。曰く人に嫁して、其の舅姑に事ふるの時期を言ふ。凡て婚姻なるものは、信に人道の大事なり。乃ち人に嫁して、其夫と體を同うし、以て他人の祖業を承け繼ぎ、舅姑に奉事して、其命を受け、之を以て吾が生父母の如くし、孝養愛敬して惰たらざるを以て本分とする也。故に禮記の昏義（婚禮は、昏暮を以てする故に昏の字を用ふる也、）篇にも、婦順と云ふことあり。婦順とは、舅姑に順にして室人（夫の兄弟姊妹より一族を総ていふ、）に和し、而后に夫に當り（當とは事つるの意なり、）、以て絲麻布帛の事を成し、以て委積蓋

藏を審に守る。〔衣服器物の出納より家財の出入などを審かにする也、〕是故に婦順備りて、而后に内和理まる。内和理まりて而后、家長久なるべき也。是を以て、古は婦人嫁するに、先づ三月、祖廟未だ毀たされば、公宮〔祖廟の宮殿〕に敎ふ。祖廟既に毀ては、宗室に敎ふ。〔壇所を正うし、祖先に習ひ、以て敎を重んず、〕敎ふるに婦德婦言婦容婦功を以てし、敎成りて之を祭る。〔祖先を祭る也〕とありて、昏禮の重きこと、婚して後舅姑に孝事するの重大なる務なること、及び其事へ方の順序の大略明白なるべし。（婦德婦言云々の解は前號に岩下子爵の詳解あれバ今贅せず）然るに近來、自由結婚などの妄說邪論、世に行はるゝより、所謂女學生風なる一種の風儀も出で來て、漫りに高尚なる空理論を唱へ、或は西洋倫理の敎化を受けて、恰も禽獸の如き志想を抱き、傲然として人を慢り、而して人倫道德の要旨と、婦人の本分たる婚嫁前後の心得などに至つては、一切之を問はざるに措き、一旦其期に際しては、頓

に其措所を失ひて、狼狽するもの甚だ多し。而して且或は朝夕餘間を偸みて、小説を繙いて、或は感戒の念を惹起すが如くなれども、却りて早く世情を解し、花鳥の餘情を味ふるの大弊害を醸し、本心喪失して慾情に勝つこと能はず、遂に或は風、馬牛より甚しき汚行醜聲を著はすもの、亦之なしと云ふべからず。嗚呼世の賢婦たらんもの、豈省み畏るゝ所ありて、言行を勵まし、心身を正しうするの方を計らざるべけんや。是れ此期に於て、特別に注意して學問せざるべからざる所以なり。婦は夫と同体にして、舅姑は夫に就ての尊者なれば、必ず尊奉を致さゝるべからざる也、既に舅姑に孝にして夫に敬事すれは、已の生父母も亦之を樂み悦ふとなれは、自ら其父母にも孝なる理なり、

（未完）

女子要言　第二篇　（七）

三輪田眞佐子

既に人の妻たらは、如何なる目的を有するものあるや。禮記曰、昏禮者、將合二姓之好、以事宗廟、而下以繼後世也、と這は歐米學者の、婚姻は畢生苦樂を共にする目的を以て、一男一女の結合する關係なりと云ふと相對照せば、其の目的を知るに近からん。今之を少く詳かに述ぶれは、曰はく、妻たる心を以て夫に事ふべし。抑も單に、夫の爲食事の給仕をなし、衣裳の出入をする如きは、婢僕の業務にして、妻たるものゝ本分を盡くしゝと云ふべからず。苟も妻たるものは、一時男子に使用せらるゝ機械的のものにあらずして、永久苦樂を共にする決心を以て、夫婦合して、恰も同体となり、而して陰陽相待つ自然を守るにあり。故に先節操を重んじ、妻たるものゝ愛情は、唯夫あるのみを知り、亦他を知らさるべし。然るに、人の妻たるものにして、若一時契約に過ぎざるものとせんか。婢妾の行

のみ。焉ぞ妻といふべけんや。其の次、精神の共通あるを要す。夫れ夫婦同一ならざるべからざるは、自然の理なり。然るに、世間妻たるものを見るに、其の夫愉色あれば、善事あるならんを知り、苦笑あれば、惡事あるならんを推すに止まり、妻も亦、夫の欠所を他人に懺悔し、而して表面には、反つて諂諛するのみにて、殆ど一年三百六十五日中、一日だにも、心の誠を互に語らひ、以て困難辛苦を共にすべき夫婦の實意を盡くさゞるもの多し。是れ全く、夫たる者の、己の妻を共に計るに足らずと蔑視するより、起るものなきにしもあらずと雖も、概して妻たるものの無識にして、世路難の謀議に與かるに足らざるより招くものなり。否諺に、女子は七人の子あるも、尙心を許す勿れと云ふ如く、實に女子は、變心し易きものなり。宜なるかな。夫の妻に内情を明さゞる。蓋し夫婦間の不幸、是れ

より大なるはなし。女子たるもの、戒めざるべけんや。

曰はく、夫の命惟れ從ふべし。人或は云はん。夫婦は、一男一女同等の權理を以て、相結ぶ關係なり。故に妻のみ、夫に從ふの義務なしと。是大に謬れり。夫れ陰の陽に從ひ、柔の剛に讓るは、自然の道理なるが如く、妻の夫に從ふも、亦其の所なり。且一家の方針を定むるにも、夫婦相讓らずとせんか。兩頭の蛇行く所を知らざるが如く、決して圓滿の生活を營む能はず。故に此の自然の法則に由りて、妻の夫に從ふは、平和の源にして幸福の基なり。近來の女子、稍、高尚の學をなし、偶己れに劣るの良人に接するに當り、恭敬の德を失ふものありとかや。吾れ思ふに、己れ高尚にして、良人愚鈍なりと假定せば、何ぞ蔑視の心を轉じて、尊敬及び愛遇の間に化育し、以て完美の域に導かざるや。元來女子の性は、人を

導くに適するなり。「トークウイル」と云ふ人は、其の妻「マリア」より志意を保存し、學問を成就する等、少からざる感化を受け、遂に思へらく、尊き心の婦人は、其の良人をして高尙ならしめ、賤しき心の婦人は、其の良人をして凡俗ならしむるものなりと。自助論に見えたり。吁、斯の如き達士、尙且妻に導かるゝこと然り。況んや彼れより下士なる其の妻は、眞の愛情を以て、其の良人に接し、其の命果して當然なるときは、勿論從ふべく、當然ならざるときは、感導するに、何の難きことか之れあらん。左れは、已れ從ふは、亦良人をして從はしむる結果を作るものなり。而して怒り易く疑ひ深く、時としては不理を云ふ良人をして、一毛の不平なからしむると否とを見れは、其の妻の賢愚を詳定するに足る。恐るべし恐るべし。

曰はく、良人を間接に補佐すべし。是れ妻たるもの、主眼の務なり。雄略帝の皇后、帝の葛藟城山に獵し、其の從臣の勇義なきを責め、正に刑せんとするや、皇后曰はく、獸の故を以て、人を殺すは非なりと、仍りて帝悟りて曰はく、朕は此の臣に由りて善言を得たりと、大に悦び給へり。是れ至尊のなす處、固より然るべしと雖も、恰も下我々女子の、仰いで以て摸範となすべし。樂羊子の妻、夫の遺物を拾ふに當り、志士盜泉の水を飮まず、廉者嗟來の食を受けざるを告ぐるが如き、且其の織る所の機を切斷して、以て夫の就學を勸むるが如きは、妻たる道を行ふものと云ふべし。晏子が御者の妻、其の夫を戒むるも亦然り。英國の「ミール」が、種々の著作をなすにも、常に妻與かりて力あり、遂に夫をして、其の妻を柱石と特み、良友とまで言はしめたり。悦はしめたり。實に今の妻たる者は、

此等の如く、良人の助とならざるのみならず、終生夫の厄介となり、大抵、良人數日不在ならは、一二の失錯をなさゞるはなし。甚だしきは、良人を玄關より出迎、及び見送の禮を厭ひ、帽子の塵を拂ひ、袴の襞を正すを忘れ、良人の譴責を受くるものさへ多からん。殊に甚しきは、妲己の其の夫をして、酒地肉林以て、長夜の飲をなさしめ、炮烙の刑を行はしむるもの、或は己の夫に向うて、舅姑の非難をなし、兄弟姉妹と夫との間をして、相反目せしむる如きは、是れ其の夫をして、禍を購はしむるものなり。世に斯の如き女子果してなき乎。

斯く論ぜば或は云はん。這は男子をして、益〻女子を奴僕視し、夫婦の眞面目を失はしむる論なり。宜しく女權を擴張して、女子を猛省せしめざるべからずと。然れども、我は決して、妻たるものをば奴僕の如く、單に手足の勞のみを盡くせよ

と云ふにあらずして、禮記の所謂、夫婦共ㇾ牢而食、合ㇾ巹而酳、所ㇾ以合ㇾ體同ㇾ尊卑一以親ㇾ之、との意に近くして、即ち誠實信愛を以て良人に事へ、良人をして、亦已れに對し、然く反報せしむべしと云ふなり。其の上、良人の親切に妻を待遇せざるものありとせば、良人の敗德にして妻の罪にあらず。否、孟子曰はく、人を愛して親まされば、其の敬に反へれと。故に曰はく、妻の心より良人を愛して、良人妻を愛せざれば、其の愛の足らざるを知るべし。妻の小心翼々として、妻たる所以の道を盡くし、以て琴瑟相和し、夫婦室に居るは、人の大倫なり。豈に考ふべけんや。

史談

徳川吉宗の母巨勢氏

小野利三郎

唐國の武后、わが國にては平政子など、則天武后といひ、尼將軍といひ、皆萬のことにさしでゝ、又はわが族を重く擧げ用ゐて、遂には邦家を亡ひし例、昔よりいと多し。こは賢だち、世の中の男を思ひ侮りけるよりにて、その分を忘れたるさかしらになむ。然るに、徳川八代の將軍吉宗の母、巨勢氏といへるは、よくおのが分を守れるのみか、わが子をいつくしむ道にも誤りなくつとめて、賢母の名をのこしけり。吉宗といへば、徳川氏中興の將軍なり。大岡越前守の主人として、世にかくれなき名君なり。この名君、この名君の名得たりしは、實に母のいつくしみ、與りて大に力ありき。巨勢氏、父は利淸といふ。紀伊國巨勢に住み、世々農を業とす。弱くして和歌山の城主徳川光貞に仕へ、一子を生む。これ即ち吉宗なり。正徳六年四月、吉宗、家繼の後をうけて將軍となりてよりは、淨圓院といひき。常に吉宗を誡めて曰はく、ゆめ三萬石のこと忘れなど。蓋し吉宗は、越前丹生三萬石の主なりき。今千萬石の主となりしとて、驕奢をなせそ。猶三萬石の主の意なれかしとのをしへなりけり。又わが弟の由利、至信の兩人、食邑各五千石に封せられしとき、吉宗を

諫めて曰はく、譜代忠勤のやから、さては紀州より附き添ひ來れるものどもには、いかやうとも、唯その功によりて賞あるべし。彼の二人のものは、士にもあらぬ卑賤しき素性、それのみか、露ばかりの能もなく功もなし。さるを、唯妾が弟なりとて、大祿を與へむは、依怙に似ていかゞあらむ。かくはいへ、既に與へしもの取り返さむも、中々に心の掟定まらぬやうにてあしかり。かくて唯彼等には、職務を命じ給ふな。そが子孫になりて、いみじき才もたりて、忠實なるものあらむともかく。總べて外戚などの重き職務にあたり、不正らぬふるまひするよりこそ、遂には國家を失ふばかりのゆゝしきことも出でくめれ。かけても職務を命じ給ふなとて、遂に二人のものゝ身終ふるまで、職務にあたらしめざりけり。かうやうに吉宗の行には、わが思ふまゝにいひさとしたりしも、天下の政には、一言だに、よしあしいはざりきといふ。

世には唯、子らの心に逆はぬやうつとむるをぞ、いつくしみぞとひが心得する母多し。これまことに、いつくしみならむやは。わが子をまことの道にみちびくこそ、まことのいつくしみとはいふべけれ。

丹波國の孝女

三浦千春

むかし丹波國笹山藩主、松平紀伊守の家臣に、何某とかやいひし士ありけり。そこに召仕ひけるはした女は、永音村といふ所の農民の娘なりけるが、うまれつき親に孝心ふかく、みやづかへもまめやかにて、いそしきものなりけるが、此女いさゝかいとまあれば、おのが部屋に入りて、何やらむ忍びやかに物するを、主人はあやしと思ひて、ある時、障子のひまよりのぞき見けるに、かの女、假面を箱より取り出して、いとなつかしげに見入りてぞありける。何するにかとこゑかけゝれば、おどろきふして、とみに物も得いはず、かさねて問はれて、やう〳〵おもてをあげ、いとつゝましげにいひけるは、わらはこと、かくみや仕へし侍れば、常に親のもとを離れゐて、戀しさのやるかたなさに、いつぞや市に出侍りし折から、母のおもてに、よく似かよひたる假面の侍りしを、かひもとめて、櫛の箱にかくしおきつゝ、ときどきこれを見て、心をなぐさめ侍るなりといへば、主人は其志を感じて、今の世には稀なる孝心ものかなと、妻子もろとも、これより後、此女を、ふかくいたはりて

ぞつかひける。」ある時この女、家刀自に申しけるは、よべ何とやらん夢見のあしくて、母のこと心にかゝり侍れど、里にまかり侍らむ。わりなき願ひに侍れど、けふあすばかりのいとまたまはらんと、いとねんごろにいへば、安きとなり、されどけふは、日もたけたり、明日の朝とくこそといへど、しひて今よりとこへば、いふにまかせて出したてゝやりぬ。永音村といふところは、三四里の野道を隔てたる田舍なりければ、ひる過つかたより出て、いそぐとはしけれど、折ふし秋の日のあし早く、道中に日はくれて、ゆくさきおぼつかなく、いかゞはせんと思ふに、かなたの松の陰に、あばらなる納屋といふものゝあるけるを、入りて見れど、たき捨たるわらなどあり。よき所こそあゝなれ。こゝにて夜の明るをまたむやと、やがて其わらを引きて、かたかげによりて、ひぢまくらして居けるに、草むらより、やぶ蚊のいで來て、いと堪がたかりければ、ふところにもちけるかの假面をかほにあてゝ、その上にかたびら引かつぎて、おぼえずまどろみたりけり。」夜なかばかりに、大の男五六人うちつれ、いづ方よりかひそ〳〵と、此納屋に入來て、火をほのぐらくともして、ばくちといふ事をはじめたり。女ふと目をさまして見れど、かゝるありさ

まのおそろしくて、こゑもたてず、死たる人のやうにてゐたり。此ばくちうちのをのこども、物かげより此女ありと、心もつかざりしが、ひとりのをのこ、ふと見つけて、くはこゝにあやしの物こそあれといふに、今一人が、いづくぞといひて、よりてかたびらを引上げみれど、おそろしげなる老女、髪をみだしてふしたり。此をのこいたく驚きて、あなや、へんげゑのものありとさけびて、にげいづれど、のこるものどもゝあわてゝ、鬼一口にとは、かゝる所のことなンめりと、とるものもとりあへず、足をやに、いづこともなく遁さりぬ。やう〳〵夜も明ゆくに見れど、ばくちうちらが捨おきたることがね、いくひらとなくちりぼひてあり。それをかきあつめて、かたびらにつゝみ持て、里に歸りてけり。まづ親をたづぬるに、常にかはる事もなく、いとすくよかにてありければ、よろこぶこと限りなし。さて、よべかう〳〵にてありけるとかたれば、親聞て、かのものども女としらば、いかなるわざはひをもなすべかりしを、かしこうのがれつるのみならず、こがねをさへ得つるは、ひとへに神のまもりなるべし、さはいへ、かくておくべきならねばとて、そのこがねを笹、山の廳にもちいでゝ、ことのよしをつぶさにまをしければ、國の掟をそむきて、ばくち

打けるものどもの捨おきけるこがねは、ぬしをたづねてかへしあたふべき限りに非ず、いまし女がとくぶんたるべしとて、やがてとらせられにけり。孝心のいたり、神も感應ましく\〵て、かゝる幸をくだし玉へるにころと、時の人かたりあへりきとなん。

家政

看護法捷徑（十二）

三笠の舍主人

（十四）病者發汗

一發汗は、健体に於ても、病体に於ても、必要の一事にして、日熱、室内の温氣、勞働、精神機能の亢進、等は皆發汗を誘起す、病体に在ては、猶此他、内外の藥用、及病性の轉期等に依りて來る、

二病者の發汗を促すには、單に温湯を與へ、（酸味ある菓實の搾汁を加ふるを良とす、）或は藥湯を服せしむ、又外用に依りて發汗せしむるには、單なる熱湯、（尋常我邦

の浴湯より稍高度のものを用ゐるべし、以下同じ）或は芥子末、食鹽、若くは石灰汁を加へたる熱湯を以て、全身浴若くは半身浴を施し、或は蒸氣浴、温濕布纏包法等を施す事有、其種類、方法、時間、等は皆醫士の差圖に據るべし、通常朝行ふを良とす、

三　發汗中は、病者に輕く軟かなる衣を被らしめ、若くは厚く軟かなる毛布にて、身を十分に纏包するを良とす、此時室內の温度は、列氏十七度半乃至二十度に保つべし、

發汗中看護者は病者の傍に看守して、被衾の脫離を防ぎ、病者の狀況に注意すべし、時として、發汗の爲に、病者脫力し、或は嘔氣を催し、或は眩暈を興す事有、（外用に依りて發汗を促す時、特に全身浴、半身浴、等に於て、此等の症を來す事多し）此時は、頭首を少し後方に斜に保持し、乾きたる手巾にて身体を拭ひ、又少量の酒類を與ふべし、

病者時として、發汗中に大小便意を催す事有、此時は、豫め温湯を注ぎて、適度に温めたる便器を與へ、衾中にて排泄せしむべし、決して褥を離れしむべからず、

四 發汗終る時は、必ず褥中にあるまゝ、乾きたる布にて身体を拭ひ、襯衣及病衣の適度に温めたるものを、新に着せしむべし、浴湯の如き外用に仍りたるものは、大なる乾布にて、一頓に身体を乾拭し、手早く温めたる襯衣及病衣を着せしめて、直に褥中に安臥せしむべし、決して少にても、身を空氣に觸れしむべからず、

五 病者發汗中は、汗の多少、臭氣の有無、色、濃淡、幷に全身一様に發汗するや、將た一局部に限りて多寡あるや、及其温度等を撿して、醫士に報告すべし、蓋、汗は通常無色のものなれ共、病に依り、又部分に依りては、黄色を帶る事有、亦腋窩、及足蹠より發する汗の外は、通例無臭なれ共、身体不潔の人、及或は熱病にありては、一種の惡臭を放つ、又病の分利期(治期に轉じたる時)に生ずる汗は、酸臭を放つものなり、其他、通常の汗は、稀薄にして、殆ど水に似たれども、一種の病、若くは何病にても、瀕死のものゝ汗は、極て粘稠なるもの也、又、汗は通常温きものなれ共、神經機能の亢進したるもの、及衰弱したるもの、又瀕死のものは、冷汗を流すものなり、故に此等の汗の性狀に注意する事、又緊要の一事也、

(十五) 病者流涎

一病者に依り、若くは用藥の爲に、過量の津唾を生する事有、之を流涎と云、此症を發したる時は、身を温かに保て、嚴に寒冒を防ぎ、其津唾は決して嚥下せしめず、唾壺を與へ置て、吐かしむべし、

二此症には、通常含嗽藥、或は塗擦藥を用う、含嗽藥は、口内に含ましめて、十分に口内諸部を嗽ひ、暫時の後吐出せしめて、能く口圍を拭ふべし、決して藥汁を嚥下せしむべからず、一日十數回反覆すべし、

塗藥を用ゐるには、先清水にて、能く口内を嗽がしめ、爾後、軟かなる毛筆にて、塗藥齒を齦、舌、若くは口蓋等に塗るべし、其用法等の詳細は猶醫士の差圖に依るべし、

三流涎症を發したるものは、口内不潔と爲り易きものなれど、屡注意して清淨にせしむべし、又眠に就くには、必ず側臥せしめ、絶えず口圍を拭ひ清むべし、仰臥して就眠する時は、津液自然氣道に流れ入るの害有、故に必ず仰臥して眠に就くを避けしむべし、

料理法（十五）　　待月葊

唐納豆の方

一大豆一斗煮る、大麥一斗能つき、一夜水にかし、翌日蒸して、日にほし、いりて、挽わり、右二品ねさせ、四五日目に、澁紙の上に干、粉よ挽、細かにふるひ、蜀椒一升、粉にして搗合す時ませる、塩三舛、水六舛、右手引かげん程に煮て、冷たるとき攪交、かたく押付、七日目〳〵に、臼にてつき合、三度はせづゝ、右の通にして、五十日立ば、用ゐられ候、兼て用意いたし、六月土用中に、拵へ候よし、

豆腐類數其外

一豆腐を、凡田樂位に切、手のはらにて、押つぶし、水氣、半分とれ候程に握り、鍋にだしを仕立、其中に入、煮候へば、吸物、煮物によし、

同油揚の方

一豆腐を、水氣なきやうにしばり、茶少し入、能すり交、ごまの油にてあげ、あつき湯にて、よく洗ひ、薄みそ汁などにしてよし、

こんにやくの方

一こんにやく玉、二つ三つ、能湯煮をして、上皮を去り、臼にて搗、ぬる湯にてこね、石灰一合程入、すいのふにてこし、其汁に半分位入れ、ねんたりと成たる時、湯煮をするなり、よく火の通るはよむし、陰干にして、壺に入置候へば、翌年まで持なり、

ところてんの方

一寒中、藻の、わろき所たかり取、幾度も、よく洗、白水三たんを取、釜にてひたひたより、少しおほく入、せんじ、藻とけ候時、通にてこし、桶に入置候へば、かたまり候也、尤かすあれば、いくたびも煮、巾一寸位、長三四寸に切、寒中一夜さらし、のち漉紙の如く成時、水をかけ、段々さらし、白く美事になりたるを、こころ任せにつかふべし、

燕竹の子

一竹の子の、新しきを取り、皮ともに、大釜の中に立置、まはりより、ぬかを詰込み、こげぬやうに致し、釜八分目程入、もし釜の上に、出候はゞ、桶をふたにして、徐

ゆる三時ばかり煑、板の上にて押つぶし、水氣を、よくたらし置む、廿日程持なり、上にかび出ても、中はさらにかはることなし、

漫錄

古今集傳授一班（つゞき）

森　馬　太

宗祇法師が家集を見るに、常縁が傳授を飽き足らず思ひ、長歌を詠みて、その志をあらはしゝに、常縁も己が懈怠を謝し、こゝろよくその需に應せしといふ。其は、文明三のとし、東下野前司常縁より、古今集の傳授の後、としをかさねて相傳のうへに、なほのぞむことありて、たてまつりし長歌、

ひさかたの、あまのうきはし、末とほく、たねせぬ代々の、ことわざは、いづれのみちも、かはらねど、なほしきしまの、やまとてふ、ことのはのみぞ、たぐひなき、かゝるあやしの、みにしあれば、くもゐにみゆる、ふじのねの、およぶたよりも、なかりしを、そこひしられぬ、わたづみの、ふかきめぐみの、しらつゆを、わがうけそめし、みちしばの、かれずもおもひ、なげきつる、としのかずさへ、すでにはや、いつとせむ

とせ、すぎぬれど、なほいたづらに、そほりゆく、老木のまつの、おもほえず、かゝるうれしき、春にあひて、いまひとしはの、ことのはを、きくがうへにも、わがたのむ、かみの御まへの、さかき葉の、さしていたらん、みちををしへよ、

反歌

みにあまるつゆをもしらであま雲の
　心たかくはきみいかに見ん

とあるにて、法師がかしこみく〱、願ぎ白し、熱心のほどを察すべきなり。あなかしこ。ゆめ、おろそかに見過ごしたまふな。住吉玉津島の神慮も、いかに忠義の法師や、とおぼしめしけん。さても。また常縁集に、宗祇法師より和歌のこと、尋ね侍りけるに、よみてつかはしける、今更に身のをこたりぞしられけるとはずはいかにしきしまのみち、とあり。宗祇に送りし消息の中にも、古今集傳授の時、門弟随一と定め申候上、其以後淵鑑心無比類事に候、當道世に殘さるべきは、貴老ならではと存候間、常縁が形見と御覧あるべく候とあり。

さて、宗祇はこれを近衛殿下、西三條實隆卿、宗長などへ傳へしを、實隆卿は、稱　公院公條卿に、公條卿は、三光院實澄卿に、實澄卿は、細川玄旨法師にと授受せしなり。（耳底記に、宗長は古今傳授したれども、あまり念をも入れなんだなり。われは連歌師にてこそあれ、道をつたへてなにすべきことにもあらず、連歌のつけあぢだによくはといふて、あまりにかまはなんだとなり。とあれ

ぞ、世間に最珍重する秘事口傳を、輕々に見なししは、別に仔細あるにや。)

續無名抄に、歌道の傳來は、云々、二條家は、爲世卿より頓阿が傳へて、經賢、孝尋、堯恵、堯孝、東野州常縁、宗祇、逍遙院實隆、稱名院公條、三光院實澄、細川玄旨法印と傳來して、八條殿烏丸などと、みな玄旨より傳へたまふ。宗祇より肖柏へ傳へられし流を、堺傳授といひ、それを南都饅頭屋へ傳へられしを、奈良傳授といふなり。云々とあり。

女誡和解（承前）

内藤燦聚　寄送

曲從第六

曲はまがるなり、從はしたがふなり、巳をまげて心だてをすなはにし、物事を爭はずして、人にしたがふことをいましむ、よりて章の名とす、

夫れ意を一人に得る、是を永畢とし、意を一人に失ふ、是を永訖といふ、人の志を定め、心を専にせんと欲するの言なり、舅姑の心、豈まさに失ふべけんや、物恩を以て自ら離るゝものあり、また義を以て自ら破るゝものあるなり、

永畢永訖をふたゝびこゝに述べ、舅姑の心をうしなはざるを解きさとすなり、志は心のゆく所をいふ、定はうごかざるなり、是れ志のうごかさゞやうに、目あてをさだめて、心を専らにするをいふなり、心を専にせんと欲するには、先づ志を定むるとなり、舅姑の心、豈にまさ

に失ふべけん哉とは、舅姑はしうとしうとめなり、舅姑の心も、もとより失ふべきにあらず、豈まさに失ふべけんや、失ふまじきとなり、物恩を以て自ら離るゝものありとは、物はひろく今日の事をさしていふ、ものごとゝいふ如し、恩はいつくしみめぐみなり、そのいつくしみめぐみに、なづみなるゝよりして、自らいつとなく、舅姑の意にそむくことも起るなり、離るとはひとつあるものゝふたつにわかるゝをいふ、義を以て自ら破るゝの解は、下の文にあり、夫愛すと云といへども、舅姑非なりといはゞ、此れ所謂義を以て自ら破るゝものなり、然らバ則ち舅姑の心奈何せん、固に曲従より尚るはなし、

此段は前に述る所をふたゝびいひさとすなり、夫愛すといふといへども、舅姑非なりといはゞとは、何事によらず、夫は此事をよしとすといへども、舅姑は此事は非なりといひて、夫と舅姑との心違ふをいふ、此れ所謂義を以て自ら破るゝ者也とは、固く其義を執て舅姑の心にまかせぬときは、舅姑に事ふるの道やぶれ、そこなふとなり、然らバ則ち舅姑の心奈何せん、固に曲従より尚るはなしとは、いかんせんは、はかつてさつする心なり、夫の愛すといひ、舅姑の非なりといふ、何れよしたがはむや、義を立てて夫にしかたへバ、舅姑の心はいかゞあるべき、かくのごときは、まことに義をまげて、舅姑の心にしたがふより、尚ることはあしとなり、

(原注)按ずるに前の文に、物は恩を以て自ら離るゝものあり、また義を以て自ら破るゝものありといひ、今こゝに義を以て破るゝの解ありて、恩を以て離るゝの解をつくさず、上文敬愼の章に、曲直の解ありて、是非の解なきが如し、諸本皆同じ、

姑爾らざる事を、しかも是といはゞ、固よりよろしく令に從ふべし、姑爾ることを非といふとも、猶宜しく命に順ふべし、是非を違戻し、曲直を爭分することを得ることなかれ、此れすなはち所謂曲從なり、故に女憲に曰く、婦は影響の如し、焉ぞ賞すべからざらん、

姑爾らざることをしかも是といはゞ、固よりよろしく令に從ふべしとは、爾は然と同じ、是はよきなり、令は令命にて、仰せごとなり、姑しからざるよからぬこともよきといはゞ、もとより其仰にそむかず、したがふべしとなり、姑しかることを非なりといふとも、猶よろしく命に順ふべしとは、非はひがこと、猶はそれにてもといふごとし、命も仰なり、順も從と同じ、若し又しかるべきよきことをひがごとなりといふとも、猶其仰に順ふべしとなり、是非を違戻し、曲直を爭分することを得ることなかれとは、是非はよきあしきなり、違戻はたがひもとるあり、曲直はまがれるとすぐなるとなり、爭分とは、是を非といひ、非を是といふを、その是と非を爭ひ、是を是、非を非と、明白に分ち爭ふをいふなり、是れ己を曲て人に從ふには、曲直

もあらそひわくることなく、是非もたがひもとむることを得ることなかれといふことなり、此れ則ち所謂曲従なりとは、前にいふ所すなはちて曲て從ふことなりとなり、女憲は前にいふ如く、女子の法とする書物をいふ、婦は影響の如しとは、影響はかげひゞきなり、形ありて影あり、聲ありて響あり、影は形にしたがひてたがはず、響は聲につれてそむかざるものなり、すべて女子は影と響の、形にしたがひ聲につるるが如く、吾意を意とせず、専ら人にしたがふべきことにたとふるなり、焉ぞ賞すべからざらんとは、焉は何と同じ、賞は嘉なり、よみすと訓ず、此こゝろは、女子よく人に順ふときは、いかなる人にても、よみしたしまざるものあらんやとなり、是れ女憲の語を引て、婦たる者舅姑の心よさからはず、曲てしたがひつかふまつるべきことを敎へさとすなり、（曲従章了）

藻塩草（つゞき）　楢の舎

もしは、よく愼みて、色に出さゞるも、大かた胸の病となりつかへをおこし、家事も心にいらず、そこ／＼に成行けど、夫はいふもいはざるも、おなじりんきのこゝろを見えり、のちにはあひだもあしくなり行くまゝ、いよ／＼思にむねをこがし、いのちをもうしなふ類多し、誠に女は、夫ひとりをたのみにて、節義を守り、こゝろを盡して、家事ををさめんとするに、夫は、こゝろ多くて、よそに思ひかへ、妻女にはうとくて、てかけめかけに

おほくのつひえを厭はず、さま〴〵のきこえぬしかたある時ば、女の身にて、口をしくも、なげかしくも、腹だゝしきは、隨分もつともなる事なり。この尤ある心をとりもちて、十分りんきしあふせたるときは、いかゞあらんと、工夫あるべし。此處かんえうの學問工夫なり。貴賤となく、男の、妻女一人をまもりて、二心なきといふは、なきためしなれど、たとへ、今のてかけをいぢり出したりとも、また外に出來、しのびのめかけを、せいとう致すとも、一人にかぎらぬ事なれど、いかゞはせん。女のりんきは、たとへバ大海を手にてせくがごとく、つひにかなふべからず。しかれば、われはうたてき名を流し、男には日にそへてうるさく思はれ、終にはちぎりもたえぬべし。そも〳〵、

りんきの根元は何ぞや。わが夫の、われより外に心をうつし、あさくなることをあげくより、外をあらそふの一念おこるにあらずや。たとへ、てかけめかけは幾人ありとも、われにも替らぬ心ならば、なにか苦しかるべき。かへつて、われとわれをうるさく、いやがらるゝ樣にしかけ、いよ〳〵外へ心のうつるわざを求むるゝ、ことのほかの了簡ちがひなり。夫は、わかき時、實ていなる人も、とし老いてわかやぎ、色めかしくなるものあり。わかき時、いろ〳〵しく、後に實体なるものあり。人情さまざまなれども、つひに女一人をまもり、外心なきといふ人はなきことなれバ、元來夫は外ごゝろあるはずの人と、常におもふべし。われになさけふかきは、其の日のさいはひと思ひ、いつよら

ず外にうつろふ色みねば、かねておもひまうけしごとく覺悟して、少しも〳〵うらむべからず。もし、夫のかたより打わけて語ることは、心よくうけあしらひて、いぶりあるべからず。又かくしつゝむことは見しらぬていにて、いつまでもしらぬになして過ぐべし。とにもかくにも、色にいでゝねたげなることいふべからず。夫の外心は、たとへば、花の咲きちるがごとし。本妻は、四季のときはにて、つねにしたしき妹脊にて、てかけめかけの及ばぬ深きえんなれば、よきこともあり、あしきことも、たがひにそひはつべきかたらひなり、外ごゝろは、花々しく見ゆれど、末なが〻らぬならひなれば、少しもわれとならび思ふことあるべからず。いかにも、夫のたのしみともなり、なぐさみともならば、とにも心よくとりもちかたらひて、夫もさきの女も、感心するやうになさけふかゝるべし。夫外心あるときは、一しほ〳〵、何事も心に入れて、家事よくつとめつゝしみ、夫をおもふ心ふかゝるべし。外の事にても、ぶさたあれど、りんき故と夫の心もまはるものなり。よくつゝしみつとむべし。いにしへの井筒の名歌も、本性ふじつあるにはあらず。ひさげの水は湯となりぬれど、よくをさめつゝしみて、夫を思ふ誠のこゝろを、夜半にや君がひとり行くらんと詠じたまひしより、心多き夫も、河内がよひを思ひとゞまりたまふとや。いかにも〳〵、心ををさめ、しつとの心おこすべからず。とても色に出さゞることなれど、胸にたくはへ病となして、何かせん。心よからぬ折々は、こしを

れの和歌にても詠じ、いにしへの賢女の、妬毒ありて害あり、ふじつにして德ありしためしの、ものがたりかゞみ草などを見て、心をはらし、あるひは、讀經だいもくなどして、むねをさむべし。八句の神咒は、三毒を消すの妙力あり、日々に百八遍をじゆして、三毒の煩惱を消し、人我の偏執なきやうにと、われと心をとゝのへふくすべし。召使、出入の、よしなき告口をいたす人には、つきあふべからず。もしいふことあらむ、おとなしくいましめて、かさねていはせぬやうにいたすべし。かゝることを取りわけて、わざはひのたねとなること、みな世におほきことなり。

一つ、てかけものには、眞實よりなさけありて、召しつかふべし。懷姙または病ある時は、わが子兄弟の思をなして、よく心をつけ、いたはり遣すべし。をつと緣あさくて、いとまを出し、えんにつけなどいたすとも、後々までもなさけふかゝるべし。もし、懷姙あらば、いく人にても安產いたさせ、わが身の實子同前に、もりそだつべきことなり。

一つ、てかけの子は、なほわが子にまさり、いとほしみ深く、衣食も一しほ念を入るべし。これも、世の中おほかた、人の口あしくて、わが如才なきことをも、とやかくと評をつけ、子にも智惠をつけ、ろの附々のもの、かたましくて、心の外のかげ言をもいたすものなり。しかれバ夫の心もまはり、わが身も胸やましく、かゝるすぢより、親子の中も、へだて出來るものなれバ、とにもかくにも、他人の子さへ養育するならひなるに、ましてや、同

じ夫のたね、わがうみたる子の、實に兄弟にまぎれなし。しんじつに、わが身にやどれる子ぞとおもひ入りて、へだてなくいとほしみ、人はともいへ、心にとひてにくみなく、ひがことなく、をしへみちびき、みぢんばかりも、私なからんとはげむべし。下ざまの人の、わる口、かげ言、少しも心にかくべからず。取りわげ腹たつべからず。苦にもつべからず。その内にも、きゝてげにもと、わがしかたのいたらざる所あらばさいはひにして、速にあらためつゝしむべし。さもなき心の外の評判は、空ふく風とおもひながして、心の誠をつくして、天の照覧にそなふべし。匹婦のことばを、とりわげ、かげ噂を苦にもつ心にては、繼子をそだつるの誠に到るべからず。

（つゞき）

村田春海歌がたり（承前）

松野操雄

或人、新古今のころのうたをこのみて、ことだてすらく、三代集よりあなたのは、めでたけれど、事ひろからで、たらはずなむある。かれ、こゝをもて、おのれは、新古今のほどをなむ、うたのみさかりとはさだむる。そは、人のうまれて、あまたのとしをへて後になむ、形もこゝろも、やうやく、たらひとゝのひて、わかぬ事、なくなりぬるがごとくに、このうたのさまも、しかなむ有りける。されど、ひたぶるに、上つ世の手ぶりをのみ、たふとみて、中むかしより、こなたのをば、いやしとして、すつなるは、はたち三十のほどのひと

の、かたちの、みさかりなるをのみめで丶、いまだ、こゝろのゆきたらはぬことを、たどらぬなり。こゝろのさとりはしも、よそぢいそぢにいたりてこそ、みさかりはとゝのふめれ。さて、かたちは、や丶、おとろふめれど、ねびとゝのひて、物々(ものもの)しきけは、そのほどぞそふめれバ、そのはたち三十(みそぢ)のわかびて、ものげなきより、かへりて、まされるかたも有(あ)りぬべけれど、かたち、はた、ひたぶるに、おとろへたりとも、さだむべからぬものをや。かくて、また、二三百年(ねん)このかたのうたは、七十八十(なゝそぢやそぢ)のおい人(びと)のごとくにて、かたちのみならず、心(こゝろ)も、ともにおとろへて、ばけ〳〵しくなりたるを、みづからは、猶(なほ)さかしらがりて、こちたく、物(もの)いふがごとし。さて、おいたるが、ほけたりとて、むげに、わかきをのみ、とるべきかは。すべて、物(もの)は、はじめさかりにして、やうやくに、おとろへゆくあり。また、やうやくにすゝみて、中(なか)ごろに、さかりになるも存(あ)るならひなれど、はじめをのみ、よしともいひがたし。そのことのさまにしたがひて、さだむべきわざなりといへり。こは、さかしらに、うべ〳〵しく、いひのべたれど、いたく、ひがことなり。三代集(だいしふ)より、あなたのは、ひろからずとは、こゝろえず。すべて、いにしへのうたは、ますらをぶりにて、事(こと)ひろく、のちの世(よ)のうたは、をみなぶりにて、ことせばし。そも〳〵、柿本(かきのもと)の大人(うし)の長歌(ながうた)に、日並知皇子尊(ひなめしのみこのみこと)の御軍(みいくさ)のあるかたちをあげ、山上(やまのうへ)の臣(おみ)の長歌(ながうた)に、まづしきひとのありさまをつくし、大伴(おほとも)の宿禰(すくね)の長(なが)

歌に、遠つ祖よりの跡をのべて、おのがこゝろをいへる。かゝるたぐひ、いとおほし。こは、みな、後の世のうたには、なき事なり。又短歌にも、ますらをのこゝろざしをのべて、をゝしきたぐひ、おほかるは、みな、いにしへにのみ、ある事にて、後の世のうたには、たえて、なき事になむ。後の世の歌は、たゞ、月花のあはれをいひ、男女のあひおもふこゝろをのべ、身をなげき、ひとをかなしむなどの、たぐひなるのみにて、いにしへにくらぶれど、かへりて、ことひろからず。さて、この後の世に、もはらとよむなることわざの中に、いにしへに、なきふしあらバ、事ひろきかたも有りといふべけれど、そは、みな、いにしへの歌には、もれたる事なし。さて、いにしへのみじか歌は、ひとへこゝろなるものなり。そは、みじかうたは、えかよむべきすがたのものなれバなり。くさぐに、おもふことおほきときは、そを長歌にのぶれバ、みじか歌に、あまたのことを、とりこめて、いはむ事は、有るまじきことわりなり。三代集のころは、ながうたおとろへて、ひとぐ、おほくもえよまず、たゞ、みじか歌のみぞ、もはらとはなりにける。さて、そのみじか歌は、おのづから、のどかにも、こまやかにも、あはれ、ひとへごゝろなる、本のすがたなむ、うせざりける。かくて、題詠のうた、もはらとなりてよりは、わづかに、みそもじあまりひともじのうちに、題のこゝろを、あながちに、つくさむとおもふ故に、うたのさま、こちたくこそ、なりにけれ。さるを、事ひろしと

おもふにや。いと、わらふにたへぬ事なり。もし、ことひろからずと、おもふふしあらバ、長歌こそあれ。みじか歌のうへに、さのみは、いかで、事ひろからむことを、もとむべき。また、ひとのよはひにたとへて、いにしへの歌を、はたちみそぢの、いまだ、こゝろの、ゆきたらはぬありといひ、わかびて、物げなきなどいへるは、あまりに、をこなるいひざまなり。いにしへより、いまにとほりて、うたのひじりとすなる、柿本、山部のふたりのぬし、また、貫之、みつねのぬしたちなどのたぐひの、いにしへいまに、すぐれたるひとぐ〱をも、こゝろの、ゆきたらはぬ、ものげなききはといひつべしや。新古今のころなるひとも、よく、古のひとを、たふとみしたへる事、そのころの人の、ゑらせるものに、あまたみゆるをや。また、ものは、やうやくにすゝみて、中ころ、さかりになるも、あるならひなりといへるも、いと、あたらぬ事なり。新古今のころは、今よりは、遠きむかしなれど、うたのうへにていはゞ、中ごろとは、いひがたかるべし。うたは、神代よりおこりて、ろのみさかりになれるは、藤原、奈良のころなり。それよりくだりて、三代集のころをこそ、みさかりのころにくらべて、中ごろとはいふべけれ。古人の、うたのこと、ゑらせるものに、古今集のころを、中興のさかりと、多くいひ、また、古今の眞名序に、うたの事をいひて、再昌とも、かけるをおもふべし　さて、後拾遺のころよりしては、はや、するにつくかたなれバ、まして、新古今のころは、いと、末ともすゑなりといふべし。このうた、延喜、天暦のころなどより、おこりたるものならむ、

新古今のころを、中ごろとも、いひつべけれど、その延喜、天暦も、うたの上にては、やゝ、くだりたるほどのときあるをや。すべて、或人のいへるは、忘れ人の、夢がたりするたぐひとや、いふべからむ。

（つゞく）

女子の地位を高むべし（承前）

内田隍南

昔日の女子は、啻に其の職業におけることにのみ、緩慢なるにあらず、また其の教育におけるも、自然男子と趣を異にして、僅に女大學、女今川、小倉百人一首位を讀み覺え。文章も平假名のみにて書き綴る位なれど、男まさりとの評判ある女すら、尋常一樣の男子より、劣ること數等なり、されば其の最も惡筆なるやからに至りては、何度ながら文かく時には、「鹿尾菜の行列荒布で御判じ」など洒灑半分に、斷りを申入るゝが例の事あり、かかる有樣は、女子自身が卑屈根性よりおこりしものなるか、父兄等の教育が不充分なりしが爲におこりしものなるか、今時より考へなば、成程女子が卑屈なりしには相違なきも、女子自身は、陰陽自ら性を異にす、女子と生まれし悲しさには、迚も男子と生が違ふゆゑ、男子と同等の地位に立つことは勿論、男子の眞似だに出來ぬは必定なれば、只々家庭にありては、父兄の教訓をまもり、他家にかしづきては、舅姑良人の指圖を受けて、從順の婦道を守りなば、其れにて女子の道は足れりとおもひしに相違なく、また父兄の心中は、

陽の剛なると陰の柔なるとは、天地の自然より來るものにしあれバ、男子には男子の道あり、女子には女子の道あり、敎育の如きも、おのづから男女によりて、其の方法を異にせざるべからず、との考を持ちしに相違なし。故に其の形迹上より思察するも、何事によらず　男子は自働的にして積極の方針を取り、女子は受働的にして消極の方針を取りしものなり、然るにこゝに、卑屈男子にとりて意外なる利益を來し、活潑女子にとりて、意外なる不利益を來すの傾あり、この故に男子にして自働的積極の方針を取らずして、受働的消極の方針を取るとあるも、謙讓恭儉の德ありとて、嘗まこれを、卑しまれざるのみならず、却て意外にも名譽を受取りしものも有りしなるべしと雖も、女子に至りては、大に然らざるものあり、今時に於てさへ、女子が受働的消極の方針を取らで、男子に似寄りし事を致さんか、只さへ口八釜しき世の人々は、後指をさして笑ふべし、況んやふるき往昔に於いては、かゝる女子を目して、「をとこあま」などゝ呼びなして、女子の仲間にも入れぬ有樣なれば、これが父たり、これが兄たるものは、常に女子を監督して、飽くまでも女らしく育つるを、第一の目的となし、申さば世間と釣合をとりて、世間にて許す範圍内にて敎育せしなり、右の次第にて、我邦女子の行爲は、何事によらず緩慢主義、卑屈根性より出でしに過ぎざれど、活潑なる者の眼孔より見れバ、嘔〱をかしくこそありけめ、昔日の女子は凡てかくの如し、然れども女子の罪

にはあらざるなり、女子を敎育するの任に當りし者の罪なり、一歩を進めて申さば、女子敎育者の罪にもあらず、實に時勢が然らしめしなりと云はざるべからず、

（未完）

安永八年版　婦女髪様

井上頼文寄贈

序

實や女は、髪のめでたからむこそ、人のめたつべかめれ、大象もよくつながるゝとは、よし田の何がしもいひ置き侍る、春は緑の柳髪より、なつは蟬鬢たるとうろうびん、秋は木葉の落髪や、かしらの雪とつもるまで、まさきのかつら、長かもじ、絶せぬ髪の品々を、筆にうつして、女の一助ともなれかしと、志かいふ、

安永八年つちのと亥の春



中なでびん　鷗つと　兩手わげ　花菱つと　丸髷



せきれいつと
なげしまだわげ



哥津山びん　に　合せつと
うつをひやうごわげ



きんしやうくびん　に
うつせみわげ



中(ちう)びん　ひしつと
よこひやうで



すゝめびん　小まん志まだわげ

澤庵漬に三種の説あり

内田隍南

去ぬる日、學の友と品川なる東海寺に遊びける時、彼の名高き澤庵和尚の墓にも參詣しけり、墓前に大なる石の鳥居あり、墓所は二間四方の石の玉垣もて圍み、其の中央に長圓形の石を並べて積むこと、澤庵漬の石の如し、實に奇妙なるものあり、よつて舊き昔日より聞傳へし澤庵漬の事を思ひ出しけるが、澤庵漬には、およそ三種の説ありて、いづれも面白けれど左に志るしぬ、

澤庵和尚は、時の將軍大猷院公の御覺え淺からねど、將軍は澤庵和尚の爲に、一庵を立てゝ遣はされけり、東海寺即ち是なり、これより將軍にも、時々御成ありき、或日將軍、庵にのぞまれけると

き、和尚ハ試みに、我が意匠より成りし漬物を進めけるに、將軍の御意にや合ひけん、殊の外なる御賞賛にあづかりけり、是れぞ世に流行る澤庵漬にて、澤庵和尚の工夫に成りしより、澤庵漬と申しつたへしと云ふ、是れ其の第一說なり、
澤庵和尚を葬りし墳墓は、一種特別の形狀をなす、恰も後世、澤庵漬の重石が樽の中にあるが如し、この澤庵漬の形容、頗る澤庵和尚が墳墓に似たるところあるより、人々此の漬物の方法を稱して、澤庵漬と云ひけるとぞ、是れ其の第二說なり、
澤庵漬は、他の漬物と比較上、能く永延に保存し得べきものにして、寒さ暑さにもかゝはらず、たくはへ易きより、たくはへ漬が轉訛して、たくはん漬と成りしなりとも云ふ、是れ其の第三說なり、

右の說、いづれも一說として聞き得べけれども、就中尤も耳に入り易くして、實說ならんと信ずべきは第一說なり、第二說の如きは、墳墓の形容より申さば、尤らしき說なれども、和尚が漬物を發明せしゆゑ、其の漬物桶の形を墳墓にうつしゝものか、將また墳墓の形が、漬物桶の形に似たるより、斯く名けしものなるか、孰れか主にして、孰れか賓なるか、孰れか是にして、孰れか非なるか、未だ俄に知るべからず、第三說は、成程たくはへ易きには相違なきも、たくはへが澤庵に轉訛せしなりと云ふに至りては、牽强附會の說に似たり、之を前二說に比すれば、頗る劣るもの丶如し、和尚の墳墓に參詣せしより、不圖昔時話を思ひ出だしゝまゝ、かくは記しぬ、

畫師の妻

江見水蔭

其五

御覧、お文は眠むさうだ。早く寐かして遣れば好いのに――我には茶漬を食はしてお呉れな――家へ歸ッたので空腹は忘れて居た。

この言葉に愈あきれて妻は答へもなさゞりき。されども捨ておくべきにあらねば、娘には床を敷きて遣り、良人には膳を出して與へぬ。娘は其床の中に入りて眠り、良人は其膳の前に坐りぬ。

火鉢を隔てゝ、妻は給使の盆を持ちながら。貴郎、何んにも御坐イませんよ。

何の御馳走が入る物か、これで澤山だ。それに只今御洗足に皆ンな御白湯を取ッたものですから、ぬるう御坐イますよ。ぬるくッても結構、水と掘米飯には馴れて居るから。

良人はかゝる境遇に馴れ給ひしか、妾とても馴れたり、文子とても馴れつらむ。そ

れにしても胸の内のむやくや、今度こそ言うて見なむか、今こそ申上げて見るべきか――否、々、愚痴かも、女子の愚痴かも。此覺悟なくて此家に嫁ぎたる妾よわらず。言うて如何にか成る事なら、假令耳をふさぎ給ふとも、打明て御相談申せど、千度繰りかへして言へどとて御心それに傾かずぞ微盡動じ給はぬ吾良人――言ふも愚痴か、女子の愚痴か、女子の愚痴はいたづらに美術家を枯らす毒水なるのみ。かく又思ひに沈入れば、給使の度に茶碗を箸で彈かれて――あれ又うッかりと仕て居ました。

故家の母樣御存命の時、いつぞやわざ〳〵お出なされて、それとなく緣切ッて娘を連れて歸れよとの御口裏。お情あまりて御情けなし。其樣なさもしき事が何として妾に出來べき。又良人を只一人、此淋しきあばらやに、御遺し申して行かるべきや。生の母樣とは言ひながら、あまりまゝしき御心根と御うらみ申せし事ありき。又此間久々にて、母樣の御手紙を取出し、御なつかしさに彼此と涙に暮れて讀行く、内妹は貴族の令夫人、それを羨ましとは思はぬかとはのめかしての御書きぶり、それとなく良人の事をあざけり給ひし御筆の綾、これも吾身をいたはりての御眞實とは思





へども――先づ考へても御覧じませよ、畫師は天職で御座りまするぞ。神と同じで御座りまするぞ。貧苦は如何にも貧苦なれど、其苦しさは通り雨、紅葉を染める時雨とは違ひまする。富貴は浮べる雲とやら、風に飛ぶでは御座りませぬか。一代の妙畫は千古不朽の寶なり。そを描きて筆を走らすべき良人の、世に知られざるは更なり、妾の母様にさへ知れざりしこそ口惜し。知らで母様の御かくれありしこそ悲しけれ。嗚呼それも道理、世に知れざるも道理。妾の眼にのみ絶世の妙畫と見えても、未だ誰の眼にも見ゆる絶世の妙畫をかき給はぬ故ならむ。妾は何を畫き給ひても、良人の畫は美しく、言ふに言はれぬ心に感ずれども、他人にては左なきなるべし。妾の眼が正しきか、世人の眼が邪まなるか、いづれにもせよ一代の傑作は、誰の眼にも好き物ならでは、古今絶無の神品とは言ひがたし。雅俗の別は抑も末、千萬人のうなづきこそ神が口うつしの賞牌なれ。

其賞牌を得給ひしか吾良人は。未だ。未だ。未だ得給はず――畫き給はず。ろを勵まし、なぐさめ、すゝめ、傍にて守るべき衛士は妻なり。妻なる妾が義務あり。聴く西洋にては美術家の保護者となりて力を盡す資本家ありとかや。

吾國にかゝる資本家なし、ありとて其保護に頼る吾良人ならぬを。されども妻と言ふ保護者が出て、天晴其大蕃を仕上げ給ふまで守らむを、よもや否とは給ふまじ。今箸箱仕舞ひてゆッたりと構へたる良人。妻は何飯桶に倚りて考へ居りぬ。此時先きに眠りたる文子は、あはれ如何なる夢裡の言葉か。家の御父樣……古木落水……畫師……いゝえ……いゝえ……あら、さうではないの――母樣々々久ちやんが、お父樣、ヘッポコ畫師だと言ひますよ。

文林

河上春月　近衛忠煕

濁りなき水にもかげはかすみけり
かものかはせの春の夜のつき
徳大寺實則

隅田川はるゆくみづもおぼろにて
やどりかねたる月のかげかな
東久世通禧

大井川いりえのまつに吹くかせの
おとしづかにもりすむ月かな
鍋島直大

鴨川のきよきながれにうつれども
なほおぼろなるはるのよの月

利休居士の像に　高崎　正風

かすかなる心のおくもみゆるかな
搖りおとしゝにはのこのはに

河上春月　前田　利嗣

大井川ながるゝみづははやけれど
のどかようかぶ春のよのつき

長岡　護美

大井がはゐせきのなみの音はして
かすみに沈むはるのよのつき

前田　利鬯

おほゐ川せの音をかりさやかにて
波もかすめるはるの夜のつき

植松　有經

けふも又花にくらしてすみだがは
波まにかすむつきをみるかな

谷　勤

隅田川ちりうくはなはみえながら
かすみはてたる春のよのつき

巖上龜　松浦　辰男

岩淵のかめもいははにのぼるなり
のぼるあさひのさすに隨せて

朝鶯　林　甕臣

あけぬるもしらぬねふかの春夜の
夢おどろかしぬうぐひすの聲

早春柳　藤井　行麿

春のおる花のよしきのいとくちは

やなぎのまゆよ先たちにけり

鄉氏のはしばの隨意莊十二景の中

筑波白雪　三浦　千春

すみだ川えぐれてわたる雲間より
雪こそみゆれをつくばのやま

細川忠興夫人　佐々　豊水

難波がたつゆと碎けしたまみれば
みをの丶秋はさもあらばあれ

春月　關　大久榮

うすぎぬをつ丶める玉の心地して
朧にかすむはるのよのつき

山霞　小澤　幸民

雲の上にみつ丶なれにし富士根も
かすめるけふはめづらしき哉

餘寒　栗原宣太郎

いで丶いなば猶風寒みさきそむる
梅をもかめにさしてこそみれ

竹間鶯　波渡里華清

竹村のはがくれになくうぐひすの
ふしなれてゆく聲ののどけさ

河上春月　鍋島　榮子

よやふけしかはづ鳴きたつ我門の
小川にうかぶつきののどけさ

すみだがは中洲の蘆のめもはるに
霞みわたれるつきのかげかな　前田　朗子

すみだ川おぼろ月夜になりぬらし　小池　道子

暮れたる岸にはなのかげみゆ
伊東ちせ子

さとの子が若菜つみつる川そひの
柳につきのかげぞかすめる
伊藤　生子

すみだ川舟さしとめてさくはなの
雲まにかすむつきをみるかな
西四辻茂子

いつしかと氷はとけてかはみづに
朧つくよのかげそうかべる
松平　健子

すみだ川さかぬさくらのおも影に
霞むつきよのなつかしきかな
安東　菊子

若菜

薄こほりまだとけやらぬ小山田に
ねぜりつむ子はあはれたが子ぞ

丑時詣歌（今様ぶり）

目黒雨峯生

全篇八章通用第二伊韻

頭にかざす鐵輪には　消えぬ思ひの燃ゆる也。
胸にかけたる鏡には　つきぬ恨も寫るなり。」
蔦の葛をいきの緒に　たどるも淋し夜の路。
枯生に颯と音たてゝ　吹き來る風も腥し。」
橋の邊にふすといふ　寐丑もうしや丑の時。
狐の鳴音も聲さえて　いづる月さへ影青し。」
杜の鳥居の注連繩に　千尋繰こと繰りかへし。
御階の下にふる鈴も　泣にしめりて聞ゆ也。」

花色衣いろあせて　思ひ乱れし黒髪に。
たつや女の後姿も　昨日の様の見えぬ也。
玉の容顔ひかりなく　雪の膚もあかつけり。
目はくぼみ口はさけ　頬肉おちて骨たかし。
咒ひ〳〵つさす釘に　咀ひ〳〵つうつ槌に。
神つ大杉うちゆらぎ　山彦とよみて物凄し。
いまはと空を仰ぎつゝ　笑ふも息はほのはあり。
燃ゑたつ思を消兼し　此世の鬼ぞ畏ろしき。

東山楠先生、嘗て牛蠡之詩あり、曰はく、

絳蠟垂涙鏡花溢　古道無人蛇夜泣
女蘿烟裊月色青　老牛欲出風颯颯
石壇拜神神不言　翠嵐如雨鈴聲濕
茜裙娘子羅帶垂　滿面宿垢蝕蛾眉
高杉根枯木魅死　金釵夜柝無人知
仰天一笑狐犀白　雲黒氣腥夜凄其

面白しとも面白く、面その娘子の有狀を見るが如き心地す。おのれ、いかで、そを譯しみんとて試みつれど、詩歌各その趣を異にする所なきにもあらず、且拙き筆の溢りに溢りて、元詩の意を得んと、企て及ぶべきに非ず、唯口惜しさの餘り、別に前の如きものをつゞり出だしぬ。それさへ、おぼけなく韻などを用ゐて、中中にかゝづらはしう見榮のなからんは、心構へにもあれど、一度は世の物笑ともあらでは、この業の上に利心もおこらねど、さては女鑑の餘白を借ることゝなしぬ。大方の韻文學者たちよ。よきに引きなほし賜へかし。

初雪のふれる朝

松浦辰男

此あさけ外に立出でゝ　山見れば山も眞白に
野べ見れど野邊眞白に　雪ふりぬ初雪ふりぬ
初雪のふれるあしたは　常に見し山もめづらし
常に見し野べも珍し　珍しき野山を見れば
住みなれし我庵さへ　めづらしきかな

育兒論

女子高等師範學校第三年生　濱武かめよ

健かなる身に、健かなる心のやどるとは、詞短うして其の旨深し。人間の此の世に處する目的は、幸を享くるにありとかや。さらど、何事をか幸とし、何業をか樂しといはん。あるはつかさ位に望をかけ、あるは黄金白金を家に倉に積み重ねて、子孫長久に榮えんことを願ひなど、心々の引く方によりて異なり。されど歸するところは、身健かにして心も健かなるにありといふべし。其の故は、身すこやかならざれど、萬の願も、徒に消えてかなはず。心正しく賢からざれど、百年の身を誤まりて、世のすたれものとなりぬべし。かくては、いかでか幸を得ん。されど、世の父母たるものは、よく其の子を育てゝ、幸を得しむべきことにこそ。よく育ふとは、たゞに身体を養ふのみにあらず、天賦の智能を啓きて心を正しうし、徳を高うするにあり。さて家にありて子を育ふは、育兒の任と云ひて、父母の共に務むべきことなれども、其の力の最も多きは母にあり。そは子生まれて四歳五歳になるまでは、母の懷にありて、たえず其の乳

養感化を受け居るのみならず、胎内にありても、既に其の氣と形とを受くるものなればなり。抑も女子の職分として、務むべきこと多かる中に、家内の治め方と育兒の二は、最も重き職務にして、中にも育兒の任ばかり、重く貴きはなかるべし。古の賢婦、今に其の名きこえたる人の上を思ふに、みなよく其の子を育てゝ、健全忠勇の人とし、芳しき名を青史の上に止めたり。まことに兒童の賢愚は、母の薫陶よろしきを得ると得ざるとにより、身躰の強弱は、其の養育法を得ると得ざるとによるものなり。この故に、賢明なる慈母にあらざれば、有爲の人物をつくるあたはず。母の任また重しと云ふべし。況んや兒童一身の影響は、未來の社會に於いて、たゞにわが一家に止まらず、ひいて一國に及ばし、傳へて後世子孫に及ぼすものなれば、功遠くして事大なり。しかるに世の女子にして、これを忽にし、或は恐れて此の任を避けんとするが如きは、甚しき謬見と云ふべし。固より育兒のことは、煩雜多端にしてたやすからず。されど女子の天性緻密にして、温柔愛育の德備はれるは、育兒の任に當るべき自然の命なり。されば女子たるものは、自らふるひて此の職に當り、この任を完うせんと心かけずばあるべからず。

きさらぎ梅のもとにて

尾崎すう子

衣きさらぎ春さり來れば、花に霞に心うばゝれ、たれも〳〵中空成物から、このめはるさめふり行

く日數も、かをれる梅のうつろふ色に、やゝ黴かるるさへ、あやしうも、はたねたうも思ひなさるるに付けても、あかぬなごりのいとをしさに、老の影かくさむやと、いふ迄にはあらねど、しばしはとまれ、かざしにだにもと、手さしのべて折らんとすれど、雪にあられをこきませたらんやうに、降來るけはひ、實によ、二月の雪、衣におつ、といひしもことわり也と、ひとりごたるゝまでに、めでくつかへらるゝは、この花にこそ。

船路の記

この書、奥書よいはく、此紀行は、眞光院妙實の著す所あり。此人、愼庵藪先生の嫡女なり。柏原氏に嫁して寡となり、節を守りて齋沐を用ひず。六十餘歲の時、上京あり。此記を作る。故ありて、仙洞明和天子の睿覽を經ると云。云々とありて、いとめづらしう覺ゆれど、茲にのせつ。因に云ふ、藪氏は肥後の人なりと。

昔の人の住捨てし一草庵の軒のつまに、年經て忍ぶつむくらめの、志深く思ひ暮らしゝ都の方に、いざといふ人にいざなはれて、大内のほとり、又は伊勢の國五十鈴河に身を淸めて、おほん神の御みや所をも、をがみ奉らむかたじけなさに立ち出でけり。しばしがほどの旅衣も、ひと日ふた日とたちて、ふたへ山、久住のたうげ、くろと鄕とかや、おほかみもすめるらむ深き山をこえて、國の君のしろしめす、豐後の國鶴崎

にいたる。松たてる門、をかしう住みなせる人のかり訪ひてやすらふ。折よくて、行くかたゐ出でぬる舟あれば、やがて其の舟にゐないして、うつり乘り侍りぬ。いつしか故鄉の方戀ひしく、こゝかして訪はまほしさの心に、はまちどりのあとおぼつかなく、つげまよふもかたはらいたしや。それがしの年の卯月のけふは、もちにぞありける。この夜の月の晴曇するも、所がら、やうかはる心地してけり。

十六日の夜も、おなじ湊にかゝりゐぬ。

十七日の晝、潮のひがたにおりたちて蛤ひろふ。こゝかしこにまろびいでぬるをとるに、おもはえずはるゞとすゝみあゆむ。目なれぬ魚とりて、めづらしとのゝしるもあり。とかくして、潮のむかひぬるといそげば、小舟に乘りてかへりぬ。其の夜月淸くして、舟を出だす。灘中より風あしく吹くとて、十三里もどりて、佐賀の關といふ所にとまりぬ。よもすがら舟人立ちさわぐ。ふねはたゞゆりにゆられて、こゝち常ならねばふしぬ。さきに出で立たれし志水何某、大慈禪寺の船〳〵も、たちもどりて同じ湊にかゝりゐぬ。

十八日、をかにあがりて湯をそゝぎて、こゝかしこ見ありく。此の地の鎭守權現の社にまうず。石の鳥居、高くあふぎてあゆみ行けば、右の方に池あり。かきつばた盛にして　こき紫ゐ、浪もそむ計りなり。いたうこうじたる折なれど、涼しくめづらし。石の橋を渡りて、みぎりにすゝむに、拜み殿、神のみあらかあり。うやうやしく宮居もの

ふりぬ。これなむ、はやすふの命と申し奉る。ゆき〻の舟やすかれといのる。灘の名も育黄とよべど、まことははやすふといふとなむ。

はやすふの灘こえかねて舟人の
さがの關にとけふはよりくる

みな〳〵夜ふけ靜まりぬる頃より、をかのかたにあがらむと騒ぎたちて、わかき人〳〵小舟にうつる。中に年たけぬる人の有りしを、す〻むれどいなびぬるを、いなともいはさず、ゑひてともなひ行かむと、とみにまろびして、小舟にうつすおと、高くきこえて、今や海におちいりなむと驚かれぬるに、やがて櫓こぎたて〻、いでぬるもをかし。

十九日、舟よりあがりて、けふは黑白の濱見むとて、わりご、さ〻え、携へて、人々あとや先に賑は〻し。まづ、神のます廣前に、ぬかづき奉りぬ。わかき人〳〵は、ちかきあたりの、うかれめをかいまみて、何くれと、はのめくもをかし。やまみちにかゝりゆけど、まつ蔭のすゞしきあたりには、ためらはず、さ〻えおろして、さかづきとり〳〵に、いこひがちにのぼる。尾端には、たふとき地藏ぼさつのおはして、舟路のあやふき時は、火をともし給ふと、人々いへり。其の尾端は、うへよりぬかづきて牧を見る。此のまきは、中比たえたりしを、此の頃おこして、牛馬をもはなちて、いにしへのま〻になりぬとぞ。爰より浦つたひせむといへど、道のほどかたしとて、またかへりのぼる。登りて大黑の濱にくだる。下りつきてみれど、あまのいそ屋　間遠にして、人も音せぬ家もあり。

おもひし小貝のからもなけれど、いそぎたちて、小黒の濱に行けど、下り坂にのぞめり。うへより見れど、たちならぶ芦のやの中にも、八重ふく軒の下すだれ、ひまありげに、靜かなるたゝずまひの床しきに訪ひよれば、あるじもこゝろあるさまにもてなしぬ。いかなる人にやと問へど、此の浦の下もる人にて、渡邊のなにがしといへり。おなじ國につかふる人なれど、心とけて、わりご、さゝえ取り出だし、みきくみかはし、あるじもゑひぬ。せうかのひもといふ、みるなむどのたぐひなるものを、たかつきにもりて出だしぬ。「君がためにはをしまざりけり」といへるふるごとも、おもひ出でられてをかし。せちに淺からぬけはひなり。さかづきをめぐらし、つきずくみぬる程に、やをらすべり出でゝ、濱邊に行けど、磯のなみ、ひまなく立ちまさりて、岩にくだけて玉ちりかゝる。袖も、もすそも、ひちまされどいとはで、あらめも、ひじきも、松のりあむど、さまぐ〵めなれぬもの、おほくあれど、めのわらはともどもに、取りもて行く。人々も、ひとり〵〵來りつどひて、そのこどもは、海栗や、さざえといふもの取るなり。それは、いは高く浪よる方にあるなり。紫の色こく、とるてもそみて、いかなるゆかりにやと、とはまほしきに、もてる貝を見れど、いがぐりのゑみもせで、いかめしきさまなり。さまぐ〵とりもて行く浦つたひ、石のおよびなく、たかきひろき、おのづから、かさなりまろびて、道なき方をつたひ、のぼりくだりて、小貝のからを、たま〵〵ひろふ。白きいさご

のかたを過ぐる所もあり、あるは千とせの松の、色ふかく茂りあふ梢の年ふるも、いまよりの千とせのみどり、うるはしく。生さきしるく見ゆるも立ちまじりて、何となく生かゝる岩ほに、時をわすれぬ卯の花の、白くつぼみがちなり。又春の名殘に、咲きおくれぬるつゝじの花の、紅にこがるゝ色の、みどりのひまもれてみゆるもをかし。次第〳〵に、伽羅のはだへにかよへる石の、かさねかさなれる方をつたひて、山に登り下りて、もと來し道に出でゝ、舟場につきぬ。旅のやどりにいたりていこひぬれば、小舟にのりて、人〳〵にさき立ちて、とまりの舟に歸りぬ。くれぬれば、人〳〵ももどりて賑はゝし。帆だなにあがりゐぬれど、大慈禪寺のふねより、とまりのつれ〴〵をとはる。志水のふねよりもおなじ心に。此のみなとにかゝりゐぬることを、けふ聞きしとてつかひあり。うき船の泊りながら、つらなりてかゝりゐぬれバ、とひとはれてたのもしかりき。此のよ、かたみに船のいでぬれど、行方もしらずなりにけり。

廿日、夜に入りて、舟行きなやみ、かこのはな、越してさじのころ、さいなみしきりにして、なれぬ舟路おそろしう、こゝちかきくれて、めのわらはもともに、舟ぞこにふしぬ。いやなやみになやみて、うつゝともおもはえず、よもすがらあかしわびぬ。あけはてゝの後、漸く人ごゝろになりぬ。ものなどすゝめられて、起居ぬれど、なべてみる舟には、やうかはりて、はがひそう作りといへる舟なり。帆はたゞこの葉のかたちにかよへる、北

ぐにのふねとかや、むかひの方をこぎ行く。此の頃めなれざれど、目とまりぬ。
廿一日、ひもくれて、波も靜かに舟行く。けふぞ灘こえ過ぎぬといへり。
廿二日、靜かなれど、舟はかどりて、からふとの浦に着きて、水を汲むとて、舟人小舟にのりて行くに、われも人も、皆乘りて行く。濱邊におりたちて、小貝のからをひらふとて、もとめあゆむ。此所は赤はげの嶋山にて、松茂り、風情いとよし。右は神明、石のきざはし高くのぼり、鳥居は前にありて、石の燈籠ならび立てり。左は觀世音おはします。おのづからなる石、ところ〲に、きざはしの風情にして、そぞつたひに登る。ふたかたにぬかづきても、舟路やすかれとぞいのる。こゝも、河竹の一夜のふしのきみある所にて、ものゝ音、いまやううたひておもしろし。人〲、こゝかしこ、さまよふほどまち〲て、又小舟にのり、もとの舟にうつれり。此の夜は、西の風ふきつゞきて、廿里ばかり、はしり行きしとぞきゝし。
廿三日、あくるより、風つよからずよわからず、行くともおもほえず、ふねはゆくなり。しづかにして、おのがじゝ、このむところにまたがひてたのしめり。おもしろき嶋山のうつり行くを見る。曇りがちなるが、くれかけて雨ふる。火うちのなだといふ灘中に、いかりおろしてかゝりゐぬるに、夜になりて浪たかく、からうねんずれど、わびしかりけり。さらばとて、五里ばかり、あとにさがりて、弓削といふ所にかゝる。

雜報

廿四日、明け行くまゝにみれど、弓削の何某とかいへる、とめる家みゆ。みつはよつはのとのづくり、かはらにてふけるあり。塀高く、みわたすみ、嶋の中は、そら／＼とぬりつゞけて、いちじるくからめきたり。出入人おほし。外はいそやがちにて、あひにあたらしきもみゆれど、めうつしにはわびし。こぎいでゝ行くに、むかひに松おほくたてり。磯ふかく神とゞまりましますみや、木がくれて鳥居たてり。すはまそら／＼と廣し、ひとへの山にてもなく、また其のきはより、さし出でし茂みの山もみゆ。磯の石立ちならびて、海の中まで、いさごの道あり。石所／＼に、をかしうつゞきて、みるめふかし。繪にうつし、ふるさと人にも見せばやとおもへど、まかせぬ筆はちからなし。みつゝ過ぎ行くぞをしき。

立ちつゞく波もさはらで一筋に
　おきの嶋根にかよふはそみち

けふもみきくみ暮し、夜はよもすがら、よも山の物がたりして更けぬ。此のふねは、とくより來りてかゝりゐぬれど、波たかけれどひかれず。友ふねは、よもすがらゆりあひて、ひゞく音高し。

（つゞく）

●行啓　皇太后陛下には、本月十七日、青山御所御出門、芝離宮よ　行啓あらせ給ひ、御苑の梅花を御覽の上、御摘草の御慰あらせ給ひきと承り奉る。　陛下は今年、大御壽還暦にあたらせ給ふも、殊にすくよかに渡らせ給ふと。あはれ、めでたきかも。あはれ、尊きかも。

●孝女に賞與　芝區三田に住まふ、稻葉子爵の夫人は、山形縣羽前國鶴岡町伊藤雄次郎長女鶴代が、世にも稀なる孝行を聞き、肴料として、金一圓を贈與せられし由。贈りし人の心、いとたのもし。贈られし人の行、いとめでたし。世の中の人の中にて、千人このこゝろもたらむよ。

●孝女　茨城縣久慈郡太子町大字淺川に、武士とめといへるあり。母の外に兄一人あり。この兄、性極めて放埒にて、日々酒のむことばかりを業としけり。さらでも、其の日の食にもさしつかふる程の貧窮もの。母はかれこれのことを苦にして、病の床に臥しゝこと三年。遂に死にき。この長き年月の間、とめの孝養は、實に情知らぬ金貸などさへ、催促のことはうち忘れ、食物など惠むばかりなりけり。かゝる孝養にても、人の命ばかりは止めがたかりければ、一度は諸共にと嘆き悲みしが、たよりなき父上おはしき。放埒ある兄ありけり。と思ひかへし、喪はたしたるその日より、同町なる長山といふ醫師の下婢となりぬ。得つる錢は、皆父の酒食の料にあて、得つる暇は、皆父を慰むることに消したりき。それのみか、主人に仕ふるにも、至りて忠實にて、この頃、その妻某

が、病みて死にし時は、甞て母に仕へし時の如くなりきと。むげに下れるこの世の中、實に見上げたる孝女なり。さて兄なるものは、まだ醉ひ狂ひありくにや。然しもあらば、疾く心を悛めずや、天爵うくべきぞ。

●感ずべき少女　栃木縣下都賀郡下生井村、印出井七右衛門の二女にて、ちよ(十三)といふあり。性質温順に、父母に仕ふると極めて厚かり。或時、僅のいひ爭ひより、母離別せられたることありき。ちよは悲しきことに思ひ、强ひて父に乞ひけれど、父もその孝心に感じて思ひかへし、再び家に呼びしと。このこと、いつか洩れ聞こえしより、あたりの人々は、皆ちよの行に心をつけしに、父母にばかりにはあらず。姉をうやまふことも、ひとかたならず。常に之に從ひて、學の道を勉め勵むほど、同じ年頃などの女には、あるべしとも思はれぬ心がけにて、これまで既に、數度縣廳より賞せられたることありきと。この愛でたき心を、行末長く變へずあれ。

●前栽に植ゑつらねたる草木を見るに、始のほどは曲れるあり。屈めるあり。撓めるあり。僻めるあり。されど植木師とかいふもの、きたりて、此處をため、かしこをなほし、あるは添木をゑつらひ、或は柱を添へなどして、年をふる内に、おのづから正しく直くなりて、美しき花さき實なるにいたるなり。人の心もかくやあるらん。常に見聞する物によりて、よくもなり、あしくもなるなり。麻の中に生ひたる蓬は、おのづから直しと云へ

るが如く、見るもの聞く物を撰らざるべからず。人は天地の靈なれば、生れながらにして善良なるものなれども、鏡もみがゝざれば曇るといへる事もあれば、かねて其の心して、つとめ學ばざるべからず。三人道を同じくすれば、わが師あり。前栽の草木も、などか人の師とならざらん。されば、人たるものは、聊なる事物につけても、等閑には打ちすぐすべからぬものにてぞ。

●境遇　木は野山に生ひいで、魚は海川に住む。人も亦然かり。自然生れ出でたる境あり。決して悲しむべからず。又樂しむべからず。さるに、世には、貧しきをかこち、賤しきをはぢ、富を望み、貴きを羨むたぐひいと多かり。拙き心とやいはん。卑しき心とやいはん。たとひ、貧賤なりとも何かあらん。富貴なりとも何かせん。唯人にまさらんと思へば、道を學びて心を明にすべきなり。學もなく智もなければ、富貴も其の人の富貴にはあらざるなり。賢くして明かなるときは、貧賤も其の人の貧賤にはあらざるなり。「形こそ深山かくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ」誰の人、いかなる人なりとも、心に花のさかずやはある。

●又　夫の家に嫁ぎたる女の、ともすれば、己の心に飽かぬ処より、舅姑を惡み、又は夫をそしるものあり。是其の己の境遇を知らぬ愚なる人なり。魚の水に住めるをかこち、鳥の空に飛ぶことを厭はゞ、誰かその愚を笑はざらん。人の境遇は、よきもあしきも、おのづから至るものなれば、苦しとていとふべからず。樂しとてはこるべからず。

況や、女は嫁ぎて後に始めて家を有ち、一人前の人とあるを得ることとなれど、假令已が心に滿たぬ事ありとも、兎角の心を起すべからず。「頭に來すめる魂は二つなしとにもかくにも君がまにまに」この歌の心を心とせば、如何なる夫、如何なる舅姑につかふるとも、決して苦しとおもふ事はあらざるべし。

四月兼題

- 五日
  - 歌　柳靡風
  - 文　野遊
- 廿日
  - 歌　野雲雀
  - 文　山吹の花を贈る詞

投稿心得

兼題歌文は婦人は何人にても投稿することを得但し一週日前より本社に屆くやうにせらるべし

宛書は必ず國光社編輯部御中とし用紙は白紙にても罫紙にても半紙形を用ゐ文字は鮮明に書かるべし

投稿歌文中より天地人の三首を撰り天に三部地に二部人に一部女鑑を送り且すべての其他の歌文は悉く原稿到着順に本誌敎の庭に掲載すべし

餘芳

みくるまのあと（つゞき）

廿八日、くもる。いよ〳〵、けふは、午前十一時には、京都に還幸ましますべきよしにて、宮のうちも、そのまうけどもにて、いとにぎはゝし。おはんむかへには、みこたちをはじめ、例のかた〴〵、停車場にいたらせたまふ。ほどなく、汽車のつきて、御所にかへらせたまへるは、十一時過なり。かりそめのおはんたびながら、はや十日ばかりにも、あらせたまへれば、めづらかなる御對面にて、御かたみに、海山のおはんものがたり、聞えかはしたまふらん。たぐひなききはといへど、たびのうさは、おなじことにて、よろづ、みこゝろに、まかせぬことこそ、おはくおはしましけめ。かゝるおはんものがたりどもを、またしく、おはんかたはらに、うけたまはる女房などこそ、又なく、うらやましきものはあなれ。よろづの、みものがたりのついでに、早蕨のすけ、

みゆきますなみぢのすゑのかぎりなく君がみいづやうちあふぐらん」となん、

よめりしとて。

廿九日、くもる。ゆふつかたより、雨ふりいでぬ。うちのおとゝより、詠草おこせたまへるうちに、吉野行啓のことを、おもひやり奉りてといふ歌に、

いかばかりうれしとおはせん吉水の花のなごりをきみにとはれて」とあり。おはん人がら、ことに、あはれにぞおぼえし。

三十日、くもる。なにごともなし。おのれ、このほどより、風のこゝちにて、ふしぬ。

五月一日、くもる。ゆふつかたより、雨ふる。また、ことなし。

二日、きのふのごとし。

三日、雨ふる。ことなし。

四日、きのふのごとし。

五日、よべより、雨なほやまず。今日は、午後一時より、うへ、宮、もろともに、京都を、たゝせたまふべき、みさだめなれば、みともの人々はさらなり、おはんおくりの上下、ひるごろより、ちまたに行きかふほどに、俄に、ことやみぬとて、か

へりくるものあり。こは、いかなることにか。うへ、宮のみこゝち、そこなはせ給ふにやと、こゝろうごきたるに、あらず。よべよりの雨にて、鐵道のそこなへるよしにて、そのすぢより、奏しけるによりて、やみぬなりといふに、まづこゝろ落ちゐぬ。よにいりて、月はみえながら、なほ雲はれず。柳のないし、

東山たかねはなるゝ月かげをひとよはみんとおもひしものを。」げに、ひとよも、よくはれたる空のなかりしは、口をし。たれも〳〵、かりのやどりに、いとまごひなどして、あすは、東京よかへらんと、いさみつゝ、出でたちたるが、又うちしをれて、もとのやどりに、かへりゆくうしろ手の、いと不興げなるも、またをかし。

六日、はれたり。今日は、鐵道のつくろひも、とゝのひたるよしにて、御いでたち、きのふの如し。きのふやみぬるに、さては、今五六日は、論あう、たゆたふならんと、たれも〳〵、こゝろたゆみつるを、いま、たゞ今といふに、なか〳〵、あわただしう、にはかあるやうにて、更に、なごりをしきところ〴〵も、おはかるべし。午後一時三十分に、うへ、宮、もろともに、みかどいでさせたまふ。みとも例のごとし。二時の汽車にて、たゝせたまふ。今日は、きのふにひきかへて、天氣もよし。

みおくりの人々のかはつきまで、こゝちよげなり。汽車のうちは、おなじみちなれど、しるさず。早蕨のすけ、

みやこへといでたつけふもしかすがにかへりみらるゝふるさとのそら」とよまれしよし、後にうけたまはりて、ことわりに、なつかしうもおぼえき。近江路のあたりは、ことに、蓮花草の花盛にて、田のもは、さながら、まうせんしきたるやうなるに、學校の生徒などの、あせつたひに、並みゐたるは、ひゝな、すゑたらんこゝちして、いとうつくし。名古屋につかせたまひしは、午後六時なり。御迎への人人、例のごとし。つかせたまひて後、雨、いたうふりいでたり。かくては又、鐵道のそこなひもやと、いとこゝろもとなし。

七日、今朝は、すこし小雨になりぬ。みさだめの如く、七時にたゝせたまふ。汽車は、三十分にいづ。みおくりのひと〳〵、例のごとし。雨中のけしきも、なか〳〵に、をかしけれど、今日は、東京にかへらんとて、たれも〳〵、こゝろそゞろきて、ものみるひともなし。早蕨のすけ、

東路のふじのすそのをゆくけふもたかねはみえず雲ふかくして」とありしと

か。處々よ、みくるま迎へ奉るさと人、先のごとし。午後五時といふに、ことなく、新橋の停車場につかせたまふ。おほんむかへには、皇太后宮、皇太子をはじめ奉り、みこたち、おとゞ、つかさ〴〵の人々、いとおほかり。滊車をおりさせたまへど、侍從、劒璽をさゝげていづ。うるはしきみけしきにて、うへ、わたらせたまふ。つゞきて、皇太后宮には、御うちきすがたにて、猶、いとわかうおはします。皇后宮、皇太子、みこたち、皆うちつれて、わたらせたまふおほんありさま、めもあやに、めでたしともめでたし。かく、あまたの御ひかりを、まのあたりに、をがみ奉る身の宿世も、いとありがたくこそ。やがて、みくるまをつらねて、かへらせたまふ。觀兵奏樂より、道のほとり、軍人のありさま、すべて例のごとし。宮城につかせたまふは、午後六時なりけり。柳のないし、

　ことなくてかへりきましゝうれしさに今日こそぬらせたびのころもを。たれも、さこそおぼえしか。宮の太夫よ、うしこまりまをして、いへにかへりしは、六時五十分なり。こたびのみともは、ためしなきことにて、いづくも、處につけて、あるすべきことども、いとおほかりしかど、みじかき筆の、およぶべくもあらぬに、病に

さへ、さまたげられて、十日ばかりも、うちふぬれど、よろづ、はかゞしからず、もらしがちなりしは、いと口をし。また、御前わたりのことは、おのがしるべきかぎりならねど、こは、女房たちの筆にゆづりぬ。

明治二十三年五月

御歌所勤務宮内屬　小出粲

つゝしみてしるす

此日記、こたび、活版にすべきよし、おほせごとあり。つきては、巻のうはぶみ、いかゞすべきと、御歌所長にはかりしよ、なにかことゞしう。たゞ、歌のことなど、とりてもせよかしといはるゝに、ふと、『この春の夢のこてふはいでましの花みくるまのあとやおふらん』といへる歌の、をかしくおぼえしかど、こゝろのひくかたに、やがて、『みくるまのあと』と名づけたるなり。さるは、めぐみの波に、うるはへる轍魚のよろこび、いさゝか、こゝにしるすにあん。

粲

（をはり）

みくまるのおと、こたびにて、またくはてたれど、つぎのまきよりは、ひさしくものせざりし星月夜物語を、つぎ〲かゝげてんかし。よむひとたち、さこゝろえたまひてよ。

懸賞歌題

對花言志

〆切三月中、四月五日發行の本紙にて報告すべし

右天地人の優等者には今般杉谷正隆三橋要也兩君の編輯にかゝる類。題。歌。集一部づゝ贈與す

教の庭

三月廿日兼題　花下言志　（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　愛媛縣松山市萱町六丁目　田村千代子

櫻ばな見るにつけてもとつくにゝうまれざりしぞ嬉しかりける

地　熊本縣菊池郡隈府町　千々波橘子

ながらへて見るぞうれしき此春も匂ひかはらぬやまざくらばな

人

あはれ又今年もはなにおくれけり　大坂府西成郡今宮村　松田もと子
わが身の業は去年のまゝにて

さき匂ふ花の木かげにやすらふも　高井　蘩子
うれしきものはいのちなりけり

さくら木に言葉のもじを殘しけん　河野　文子
人のこゝろもはなといふべし

をしめども止まらなくにちる花は　伊藤加位子
限りある身のほどをしるらん

咲き匂ふ花の木かげを立ちならし　佐々有鄰子
おいずしなずに春ごとにみん

あだの名をおへる櫻に似たるかな　道廣八重子
言葉のはなにはひなき身は

世の中はかくぞはかなきさくら花　松田　靜枝
ちりし木かげはぬる人もなし

木のもとにひと夜ねなまし手枕の　橋本かずゑ
のべのさくらをわが物にして

吹く風にちらぬさくらの花ならば　中山　糸子
こゝろにかゝる雲やなからむ

とし毎に老ゆるわが身も忘れつゝ　堀内　安子
花見るときはたのしかりけり

かずならぬわが身も花に劣らめや　石井つね子
世に二つなきやまとごゝろは

敷島のやまとごゝろのさくらにも　山崎くみよ
おとらじと思ふわが身なりけり

二つなきやまとごゝろの花にこそ　山手はな子
なずらふべきはさくら也けれ

よをふれどむかしながらのやま櫻　上原とみ子
人のこゝろのはなもかくこそ

さく花はまたも匂はん時しあれど　井手ゑつ子
老いて返らぬ身こそつらけれ

憂き事も花のいろかにわすれけり　松井たまみ
かゝるこゝろに世を過してむ

大方のひとにめでられ咲くはなの　足利世根子
はへある色をこゝろともがな

深やま木にまじる梢のはなもまた　植木　鋼子

よにあらはるゝ春をこそまて

春毎にさけるさくらをおなじくは　雲井花子
なれ來し友と千代までも見む

かぜにちる花のにしきに包まれて　濤川きは子
今宵はこゝにくさまくらせむ

咲く花にこゝろの駒をつながれて　濤川敬子
この下かげはねてこそさられね

ちることを思はざりせばいとゞ猶　飯田梅子
樂しかるらむはなのしたかげ

散る花をことごとくさにして今日も又　稻田君子
ながきはる日をくらす木の下

さとりなきはるの花さく木の下に　河野みえ子
浮かるゝ玉もあらじとおもふ

年ごとの花はむかしにかはらねど　尾崎七雄子
かはるは人のすがたなりけり

世の中をいとふとなしに嵯峨の山　平山ゆふ子
わが世は經なん花かげにして

三月二十日兼題　櫻の記

天　福岡縣生葉郡市杵高等小學校　上原とみ子

世に櫻ほどめでたき花はあらじ春の朝霞かゝれる野山の末ふりにし柴の軒端に雪か雲かと咲きいでて諸人のみやび心をあくがれしめ絶えて櫻のとまでかこたしむさてはやんごとなき大宮人にもかざされいやしき賤のめにもめでられやるせなきますらをの心をもなぐさめはたきよらなる世捨人の友ともあり朝日に匂ふすがたはやまと心にさへたとへられ國つ人より始めて遠き國の人までもめではやさるゝはげにさることぞかし

地　愛媛縣松山市萱町六丁目　田村千代子

朝日のかげに匂ひ出ては大和心のうるはしき色をたゝへられ朧月夜にちりみだれてはうす雲のおもしろきあとにたぐへられて神代のむかしよりおほくの年月を經ぬれども花の春にあきぬといふ人だになくさくをまちちるを惜しみてうへもなくもてはやさるゝはいかなる花の幸にかあるらむ世に花は多かれど花としもいへばさくらの名にのみなりはてたるも理なりかしあはれこの花は外國には

にほはずと聞けど此日本にうまれ出て花の盛の春にあへるわが身の幸もまたうれしかりけり

人

北海道渡島國江差港九艘川町　足利世根子

世の中に人の愛る花は多くあれど我國の櫻にまさるものありともおもはれずされど花の王とたゝへよぶもことわりになん

支那人の牡丹に於る佛蘭西人の薔薇に於る實に美しき花にはあれど或は刺ある或は唯富貴をきそふ草花にしてしかも何れの國にも咲出るものなれどさまで珍らしからず

獨り櫻は只我國にのみありて神代より今に至るまで春毎の旭に咲き匂ふ姿は白きが中に薄紅の色をこめなよ〳〵として風に散りやすきさまなれど優にやさしき香のうちに凛として氣高き風情あるは梅菊にもおとらじいかで浮きたる粧をてらして一時の香を爭ふ薔薇牡丹の類にくらぶべき

されど行暮し大丈夫の爲に一夜の宿のあるじとなり眞心を九重の空に告し忠臣のなかだちせしも此花ぞかし

かゝるめでたき花の我國にありながら近頃人の物好なる異國の花の色香にこゝろ迷はす輩多きこそかなしけれ

あはれ世の人の此日の本に生れし甲斐には櫻の花の王となりて四方に匂ふを心とし我國の光りを異國までも輝かさるんこそ願はしけれ

佐々木有鄰子

しき島の大和心を人とはゞ朝日ににほふ山ざくら花となにがしの大人のよみ出たまひけんもうべなりけり木のめ春雨のどかにはれてしなとの風のおとなひ青柳のいとしづけき空のけしきにうかれいでたるは山のたをりに今をさかりのかげになもありける雲の衣には雲雀啼霞のそでには蝶飛かひ帶にせる川瀬の蛙の聲とり〳〵あれど此の一樹のにほひこそむらきもの心をみがくかゞみにはありけれあなゆかしきかも

松田　靜枝

吹く風も勿來關の朝丈夫が馬の跡の匂ひゆかしく行き暮れし須磨の夕武士が鎧ふ枕の香りなつかし

爰に十字の唐歌をとゞめて英雄の魂千歳にかうむしみよし野に一目千本の名を殘して舊き都を忍ぶ涙と共に散りくる花は憐れに乙女子が蠶飼ふあたり繭を出たる蝶かと見ねて落ちくる花は樂しげなりあはれ花よなれはいかでかく武士と交り深き我が御國とのゆかりあつき實に朝日を受けて其香ひの遠く外つ國々に類なく我が敷嶋の大和魂かくぞと歌はれしはまことに花の面目優にやさしき花の世界の武士なれ

山手はな子

櫻てふものは異國にはあらで獨り我日本にのみあるぞめでたき此名すめらぎ草又かざし草とも傳へけり今を盛りと咲き匂へるありさまは濃き薄き殊に墨染の花まであリて近きものは唇を開き語るが如く遠きものは手を揚て招くに似たり萬山の白き雪と疑ひ沿河の長き雲と訝り顔に觸れて匂あり面を拂うて冷かなり諸人其艶美を稱せぬはなし昔後醍醐の帝亂臣賊子の爲め隱岐國の遠島に移され玉ひ天下勤王の士少なく宸襟を惱まし玉ふ此時に當り兒嶋高徳てふ人此木に十字の唐歌を記し宸襟を安じ奉りしとかや聞き侍る今は千年をへだつれど忠臣義子の事蹟を語らむ櫻も共に心に浮び花を詠めては忠臣の事柄まで想ひ起すことゝはなりぬ又ある人は敷島の大和心を人問はゞ朝日に匂ふ山櫻かなとなん詠みたりけるさもあるべき事なり誠に花の美しきは我國柄の精華にして其香の芳しきは大君の御德の薰にして到る所恩澤にうるほはぬはなく其花の異國になきは皇統の一系長く天地とかはりなく稜威六合に光り渡り異國人の羨み望める國柄なりげに日の本の花とこそはなりにけれ

植木　鋼子

東雲の露重げにあさい顔なるもいと愛らしきに朝日に匂ひ咲き出でたるさまことよならけたかく又たぐふ物なしや遠き高峯には雲か雪かとあやまたれ散かふ谷川には瀬々の白波立まさるとも見ねて下す筏のおはつかなげに漾ふもあはれなりおはかたの人々咲初るより散果るまで長閑成日もしづ心なくあくがれ暮す春の春たるもなれ有れむなるべし

女鑑第三十四號目次

女鑑
內外表裏の別

論說
玉磨かざれば光なし……細川潤次郎
女子要言第二篇(六)……三輪田眞佐子

史談
淺岡　小野利三郎　孝女しよろが事　片岡正占

家政
看護法捷徑(十一)　三笠舍主人●料理法(十四)　待月芥

學園
女子書牘文論(承前　目黑利三郎●女服考(第十三稿)　有住齊

漫錄
女誡和解　內藤燦聚●村田春海歌がたり　松野操雄●猿蟹合戰
あゝま●女子の地位を高むべし　內田隗南
●齒師の妻(其四)……江見水蔭

文林
歌　近衞忠凞●德大寺實則●東久世通禧●毛利元德●鍋島直大●佐々木高行●高崎正風●黑川眞賴●小出粲●坂正臣●植松有經●谷勤●佐々豐水●村上秀發●鍋島榮子●蜂須賀隨子●前田朗子●柳原愛子●小池道子●松平健子●鳥尾廣子●中島歌子●安東菊子●林甕臣●小澤幸民●

雜報
皇后陛下の御德●梅の花●鶯の聲●花のにほひ

餘報
みくろまのあさ(つゞき)

敎の庭
歌文　數十首

口畫……富岡永洗
插畫……武內桂舟

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京麹町郵便局へ御振込可被下事○郵便劵を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さす全員領收の上は直に女鑑を發送すべし若し強て領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未稅の來書は一切受取不申候事

女鑑　毎月二回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金十五錢

明治廿五年三月十二日遞信省認可
明治廿六年三月十九日印刷
同年同月二十日出版

發行兼印刷人　東京麹町區平川町六丁目十二番地　川崎直衛
編輯人　同　東京麹町區平川町五丁目十六番地　山根勇藏
發行所　國光社

經世

本社は從來主持する所の趣意に因り。國体を擁護し**皇基**を鞏固にするを本領とし。**尊王尚武**の美風を擴張し。**經國濟民**の要務を講究し。世道を維持し風化を宣揚し。人心を忠愛に致し。民俗を勤儉に趨かしめ。智識を開發して專ら實業者に資益せんことを務め。今後益々記事を精選し。紙面を改良して**十六頁以上**の新聞紙と爲さんと欲す。今左に記事改良の目的を掲示す。

●社旨　正大維れ精維れ一なり●論説　公平偏無く黨無し●雅藻　雋逸韻を具へ致を具ふ●記事　精確繁ならず冗ならず●諷喩　奇警旨あり興あり●雜報　選擇瑣を去り褻を去る●通信　迅速都に及び鄙に及ぶ●文章　爽快簡を尙び易を尙ぶ

定價　一枚金壹錢五厘●東京市内一ヶ月前金三十五錢●地方は郵税共一ヶ月前金四十五錢の割

本紙は四月一日第百號を期し紙面改良と共に大附録を添へ購讀諸君に供す

發行所　東京市赤坂區赤坂田町二丁目十五番地　**經世社**

大賣捌　●東京　共同新聞舗　東海堂　増山支店　信文堂　精華堂　萬丸堂　弘文堂　●大坂　岡島書店　●京都　東枝律書房

（遞信省認可）

國光社印刷部印行